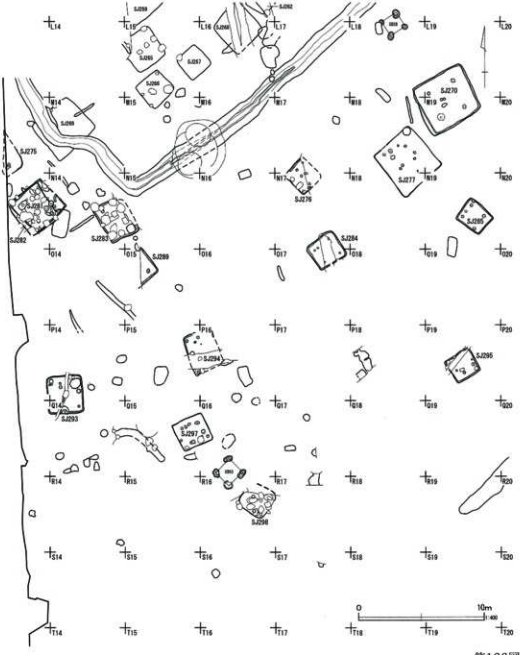
(2) 第2群の住居跡

第2群は、調査区中央を南北に貫く水路跡中央部の西側に位置している一群である（第166図）。分布範囲は、方形環濠と水路跡から西側に張り出した谷部に挟まれた区域にあたる。また、調査区西側の第12地点北半部の集落へと広がっている。

住居跡の軒数は、29軒（第270～298号住居跡）を数える。なかでも、周囲に溝を巡らせた第279号住居跡は特筆され、低地部に立地する遺跡からの発見例が増えている。

第2群では、住居跡同士の重複がきわめて少ない。重複例も、ほとんどが第279号住居跡周溝との重複である。

住居跡の平面形態は、方形と東西に長軸をもつ長方形に、概ね分割される。第1群でみられた南北に



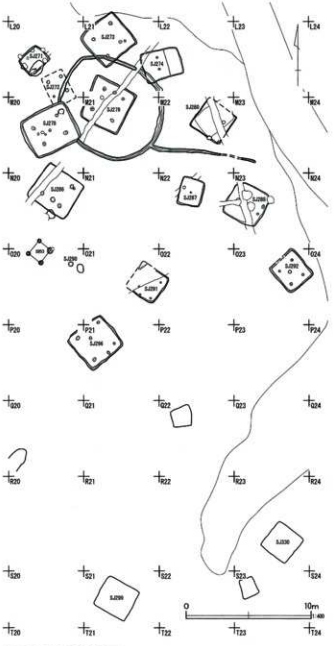
第166図

長軸をもつ長方形は、少ない。

規模は、第1群と同様に大別できる。しかし、一辺4～6m、一辺3m前後の中型・小型のものが、ほとんどを占めている。

南北軸の方向は、調査区中央を南北に貫く水路跡を意識した方向と、水路跡から張り出した谷部を意識した方向に分類できる。

第1群と異なる密集度の低い状況において、住居跡の特徴を分類することは難しい。但し、周溝が巡らされた第279号住居跡の存在や、水路跡・谷といった地形を意識した方向性、格差の少ない規模などに、集落展開の計画性を窺うことができる。



第2群の住居跡分布図

第270号住居跡（第167図）

L18・L19・M18・M19グリッドに位置する。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。主軸長7.65m、幅6.76m、確認面からの深さ0.36～0.49mを測る。主軸方位は、N－30°－Wを指す。覆土は自然堆積で、南部から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。方形に配置され、いずれも掘り込みが深い。覆土の断面観察から柱痕・柱掘形充填層が確認でき、P1・P2では柱材の残欠も検出されている。

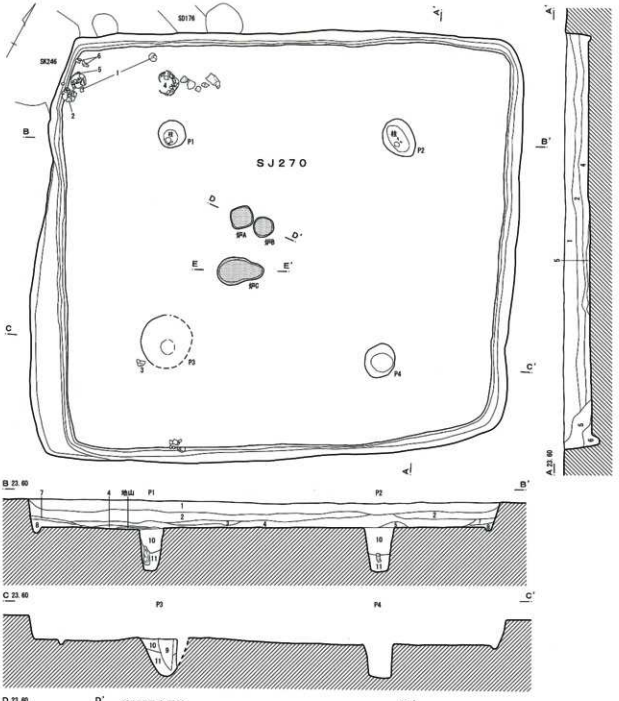
炉は、3基検出されている。いずれも地床炉で、住居中央付近西側に位置している。炉Aは、南北0.36m×東西0.42mの方形に焼土化している。炉Bは、炉Aの東側に接し、南北0.31m×東西0.33mの円形に焼土化している。炉Cは、炉A・炉Bの、南側に所在する。南北0.44m×東西0.73mの倒卵形に焼土化している。

壁溝は、全周する。幅0.09～0.28m、床面からの深さ0.04～0.07mほどである。

貯蔵穴は、付設されていない。

遺物の分布は、北西コーナー付近に集中している。図示したほかに、壺・甕類1066.8g、高坏・器台類90.3gの図化できない微細な破片も出土している。

第168図4は、壺である。頸部には2点一単位とする円形浮文が4単位貼付されている。胴部上半には、2段にわたって単節LRの縄文が2列とその下辺の「S」字結節文を一単位とする施文がみられる。また、外面の無文部には、赤彩が施されている。



第270号住居跡

1　暗黄灰色土　炭化物粒子少量　黄灰色粘土ブロック多
2　暗褐色土　炭化物粒子多　黄灰色粒子ブロック少
3　黄灰色土　粘質土
4　暗褐色土　炭化物ブロック少
5　暗褐色土　炭化物ブロック多
6　黒灰色土　黄灰色粘土ブロック多
7　黄褐色土＋暗褐色土
8　暗黄灰色土　炭化物ブロック少
　　暗黄灰色土粘土ブロック多

炉

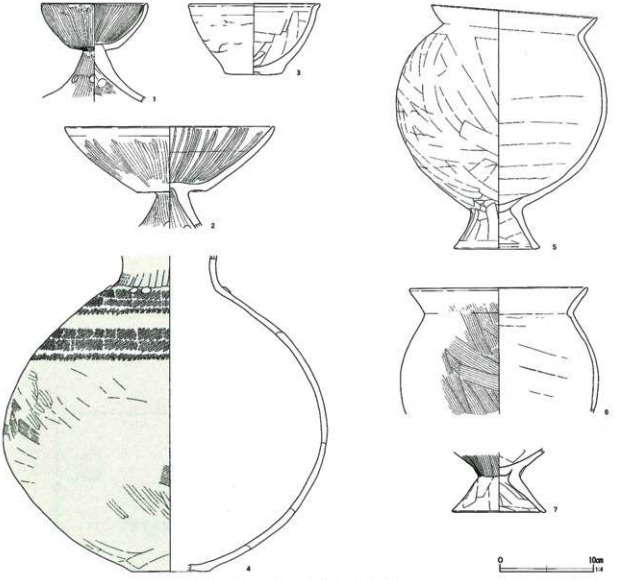
a　明赤褐色土　焼土層　炭化物少
b　明灰褐色土　焼土粒子少
c　灰褐色土　焼土粒子微量

柱穴

9　暗灰褐色土　柱痕　白色粘土ブロック多
　　炭化物少　しまりやや強
　　粘性やや強
10　暗褐色土　柱抜形充填　白色粒子少
　　炭化物少　しまりやや強
　　粘性やや強
11　暗灰褐色土　柱掘形充填
　　白色粘土ブロックやや多
　　炭化物少
　　しまり・粘性強

0　2m

第167図　**第270号住居跡**



第168図　**第270号住居跡出土遺物**

第48表　**第270号住居跡出土遺物観察表**（第168図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	11.2	(10.4)		AE	A	にぶい黄橙	85	№9・11　円孔2×2
2	高坏	22.2	(10.8)		BG	A	にぶい黄橙	80	№7　円孔3　外面赤彩痕
3	小型鉢	13.8	7.6	7.0	ABE	B	橙	90	№2　部分的に黒斑
4	壺		(33.2)	(8.2)	ABCEG	B	橙	85	№12　円形浮文2×4　単節LR2列+S字結節文×2段　赤彩
5	台付甕	17.6	25.8	9.2	AEJ	B	にぶい橙	95	№9
6	甕	(18.8)	(13.3)		AE	B	橙	10	№10　外面に煤付着痕
7	台付甕		(6.7)	(9.4)	E	A	灰黄褐	10	

第271号住居跡（第169図）

L20グリッドに位置する。重複する第619号土壙との新旧関係は明確ではない。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。長軸長3.46m、短軸長2.78m、確認面からの深さ0.24mを測る。長軸の方位は、N－46°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

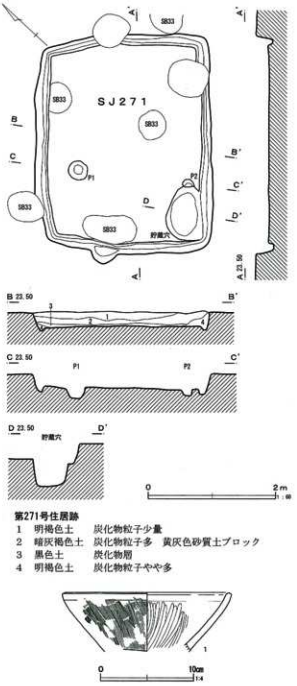
主柱穴・炉は、確認されていない。

壁溝は、全周する。幅0.14～0.23m、床面からの深さ0.05～0.07mほどである。

貯蔵穴は、南コーナー部に付設されている。長径

0.90m×短径0.57mの倒卵形で、床面からの深さ0.39mほどである。

ピットは、P1・P2の2本である。P2は貯蔵穴と重複する。



第169図 **第271号住居跡・出土遺物**

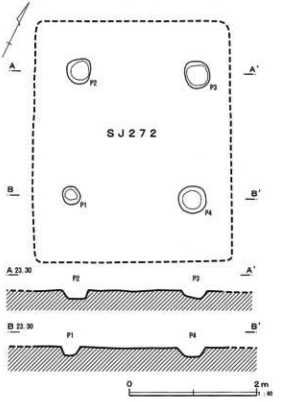
遺物は、図示したほかに壺・甕類128.3gの図化できない微細な破片も出土している。

第272号住居跡（第170図）

L20・M20グリッドに位置する。方形に配置された主柱穴4本のみが確認されている。一辺3.8～4.0m前後の住居と推定され、南北軸の方位は、N－24°－Wを指す。

第279号住居跡周溝と重複する。新旧関係は第272号住居跡の確認状況から明確にできないが、確認面の高さの違いから、第279号住居跡の方が新しい可能性もある。

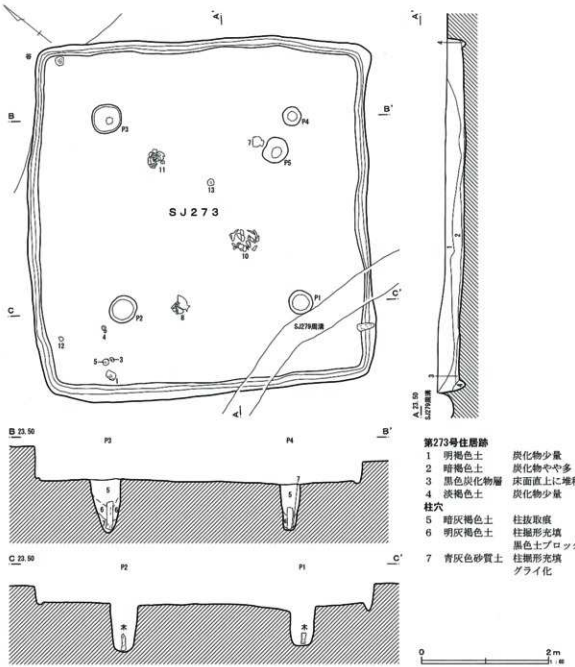
遺物は、壺・甕類30.3gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。



第170図 **第272号住居跡**

第49表 **第271号住居跡出土遺物観察表**（第169図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(17.4)	(6.2)		AE	A	にぶい橙	5	貯蔵穴



第171図 **第273号住居跡**

第273号住居跡（第171図）

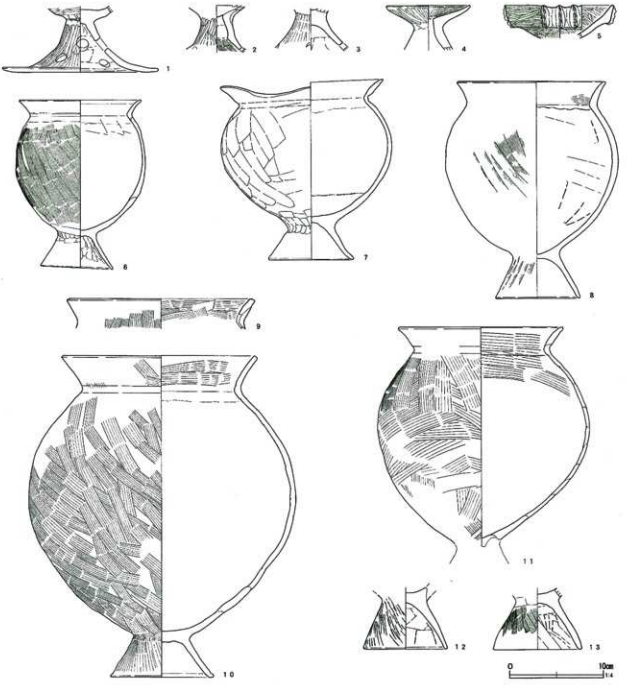
K21・L21グリッドに位置する。第279号住居跡周溝と重複し、確認面の高さや覆土の堆積状況から、第273号住居跡の方が新しい。

平面形態は、方形である。長軸長5.59m、短軸長5.40m、確認面からの深さ0.26～0.34mを測る。長軸の方位は、N－50°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況を明瞭に看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。柱間は、P2－P3よりもP1－P4の方が狭く配置されている。いずれも平面規模に比べて、掘り込みは深い。覆土の断面観察から、上層には柱抜取痕の埋没層、下層には柱痕・柱掘形充填層が確認でき、柱材の残欠も検出されている。

炉・貯蔵穴は、検出されていない。

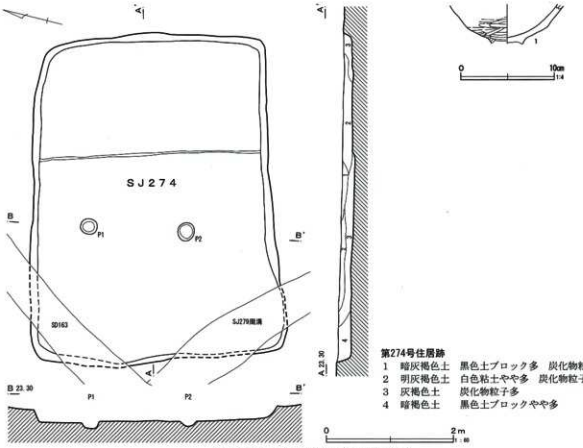
壁溝は、全周する。幅0.10～0.28m、床面から



第172図　**第273号住居跡出土遺物**

第50表　**第273号住居跡出土遺物観察表**（第172図）

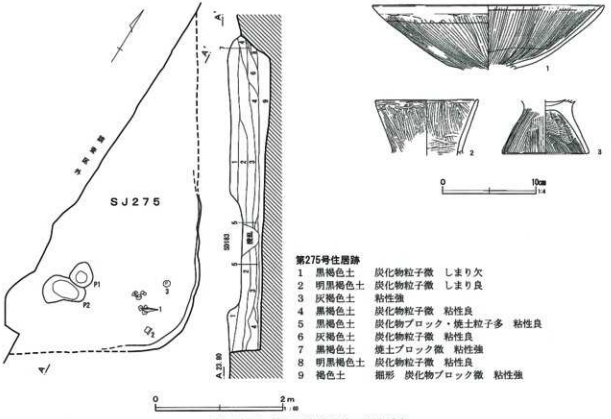
番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏		(7.0)	16.6	AD	A	にぶい黄橙	50	No9　円孔4+4(千鳥配置)
2	高坏		(5.0)		ADE	A	橙	10	No7　円孔3　外面赤彩痕
3	高坏		(4.4)		AE	A	浅黄橙	20	No8　円孔5
4	器台	8.6	(4.6)		BDE	B	にぶい黄橙	40	脚部風化顕著
5	盌	11.4	(3.5)		E	A	淡黄	10	No8　棒状浮文　外面赤彩
6	台付甕	12.8	17.7	(7.6)	BCEG	B	にぶい橙	95	
7	台付甕	17.2	18.8	8.8	ABCEGI	C	にぶい赤褐	90	No4　二次的被熱による風化顕著
8	台付甕	15.6	23.0	9.0	E	B	橙	95	No6　器面風化　外面胴部中位に黒斑
9	甕	(19.0)	(3.2)		ADE	A	にぶい黄橙	5	外面に煤付着
10	台付甕	20.4	33.9	(10.8)	ABCGI	B	浅黄橙	85	No5
11	台付甕	17.1	(23.0)		ABCGI	B	橙	75	No2
12	台付甕		(6.5)	8.5	ABDE	A	浅黄	10	No10
13	台付甕		(7.5)	8.8	AEI	A	にぶい黄橙	10	No3



第274号住居跡

1　暗灰褐色土　黒色土ブロック多　炭化物粒子少
2　明灰褐色土　白色粘土やや多　炭化物粒子多
3　灰褐色土　炭化物粒子多
4　暗褐色土　黒色土ブロックやや多

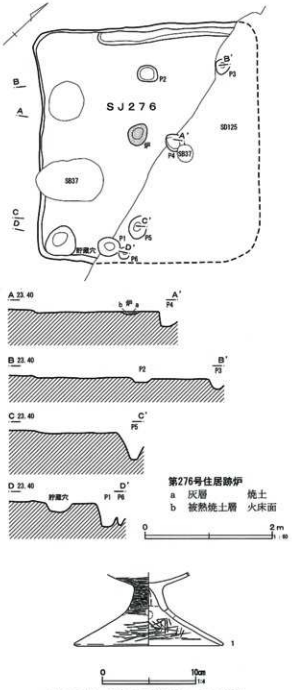
第173図　**第274号住居跡・出土遺物**



第275号住居跡

1　黒褐色土　炭化物粒子微　しまり欠
2　明黒褐色土　炭化物粒子微　しまり良
3　灰褐色土　粘性強
4　黒褐色土　炭化物粒子微　粘性良
5　黒褐色土　炭化物ブロック・焼土粒子多　粘性良
6　灰褐色土　炭化物粒子微　粘性良
7　黒褐色土　焼土ブロック微　粘性強
8　明黒褐色土　炭化物粒子微　粘性良
9　褐色土　撹形　炭化物ブロック微　粘性強

第174図　**第275号住居跡・出土遺物**



第175図 **第276号住居跡・出土遺物**

の深さ0.04～0.10mほどである。

ピットは、P5が主柱穴P4に近接して位置している。

遺物は、住居中央付近や西コーナー部にまとまった分布がみられる。出土量も多く、接合率も高い。図示したほかに、壺・甕類616.6gの図化できない微細な破片も出土している。

第172図5は、小型の複合口縁壺である。外面には3本一単位とするキザミが施された棒状浮文が、3単位貼付されている。また、赤彩もみられる。

第274号住居跡（第173図）

L21・L22グリッドに位置する。第279号住居跡周溝と重複するが、新旧関係は明確ではない。

住居中央付近の床面に、南北軸に平行する比高差0.05mほどの段差が生じている。覆土の埋没状況には、2軒の住居跡が重複していた痕跡を確認することはできない。段差の影響を反映させながら一つの竪穴住居跡が埋没した状況と捉えられ、本住居跡は段差より東側の部分が拡張された1軒の住居と判断される。

構築当初の住居は、南北長3.84m、東西長3.34mの南北に長軸をもつ長方形である。拡張後は、東西長が5.19mまで拡大し、平面形態も東西に長軸をもつ長方形に変化する。確認面からの深さは、西半部が0.20m、拡張された東半部が0.15mを測る。拡張後の長軸の方位は、N－76°－Eを指す。

ピットは、拡張後住居の南北方向の中軸線付近に沿って、P1・P2が列んでいる。いずれも掘形規模が小さく、主柱穴と断定することはできない。

第51表 **第274号住居跡出土遺物観察表**（第173図）

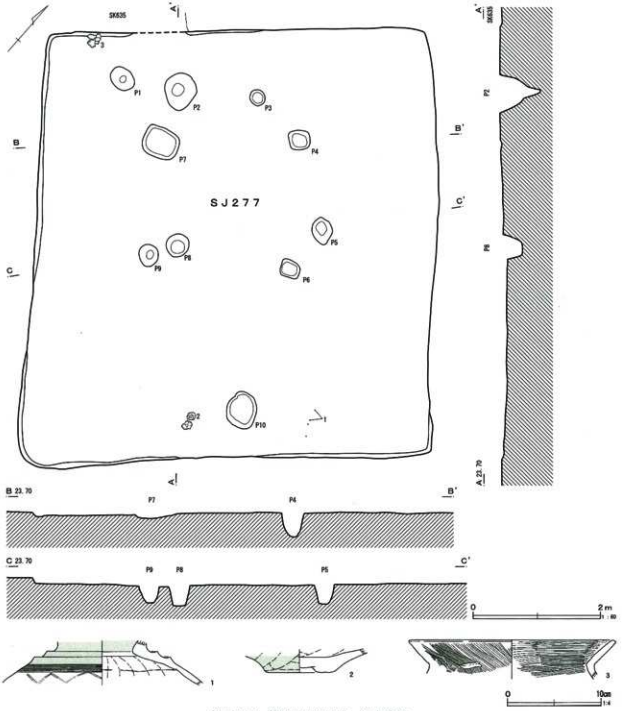
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏		(4.2)		ABGH	A	橙	10	

第52表 **第275号住居跡出土遺物観察表**（第174図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	24.5	(6.8)		DE	B	灰黄	50	No3 Pit1 内面に黒色付着物 外面に煤付着
2	壺	(10.6)	(5.9)		AE	A	にぶい橙	5	
3	台付甕		(5.7)	8.8	DE	B	橙	10	No1

第53表　**第276号住居跡出土遺物観察表**（第175図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏		(7.8)	(16.0)	AEJ	B	にぶい橙	30	貯蔵穴　円孔4



第176図　**第277号住居跡・出土遺物**

第54表　**第277号住居跡出土遺物観察表**（第176図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	壺		(4.7)		AB多GI	A	橙	5	№3・4　内面頸部・外面無文部・鋸歯文に赤彩
2	壺		(2.5)	6.7	AB多G	A	にぶい黄橙	5	№1　外面赤彩
3	甕	(21.4)	(4.1)		ADE	A	橙	5	

炉・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

遺物は、図示した1点のみである。

第275号住居跡（第174図）

M13・N13グリッドに位置する。南東コーナー部付近のみが検出された平面形態が方形の住居跡で、ほかは調査区外にある。

規模は一辺が5.5m以上と推定され、確認面からの深さは0.07～0.18mを測る。検出された東壁は、N－29°－Wを指す。覆土は、自然堆積である。

炉・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

ピットは、重複するP1・P2の2本が住居南東部に位置している。いずれか一方が、主柱穴となる可能性もある。

遺物の分布は、南東コーナー付近に集中している。図示したほかに、壺・甕類140.1g、高坏・器台類66.1gの図化できない微細な破片も出土している。

第276号住居跡（第175図）

M17・N17グリッドに位置し、床面が露呈した状態で確認されている。

平面形態は、方形である。主軸長3.75m、幅3.49mを測る。主軸方位は、N－45°－Wを指す。

炉は、地床炉である。住居中央付近に位置している。南北0.36m×東西0.30mの倒卵形に焼土化している。

壁溝は、北西壁の一部で確認されている。幅0.21～0.26m、床面からの深さ0.02～0.05mほどである。

貯蔵穴は、南コーナー部に付設されている。南北0.53m×東西0.45mの平面倒卵形、床面からの深さ0.14mを測る。

ピットは、P1・P2・P3・P4・P5・P6の6本が検出されている。その配置から、主柱穴と断定できるものはない。

遺物は、図示したほかに壺・甕類18.4g、高坏・器台類50.5gの図化できない微細な破片も出土している。

第277号住居跡（第176図）

M18・M19・N18・N19グリッドに位置し、床面がほぼ露呈した状態で確認されている。確認面の違いから、重複する第635号土壙よりも新しい。

平面形態は、方形である。長軸長6.84m、短軸長6.60mを測る。長軸の方位は、N－42°－Wを指す。

炉・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

ピットは、P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9・P10の10本が検出されているが、その配置から、主柱穴と断定できるものはない。

遺物は、西コーナー部および南東壁中央壁際付近にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類924.6gの図化できない微細な破片も出土している。

第176図1は、パレス壺の胴部上半から頸部の破片である。外面には、横線文とハケ工具の刺突による鋸歯文が施文されている。また、鋸歯文と無文部には、赤彩痕がみられる。

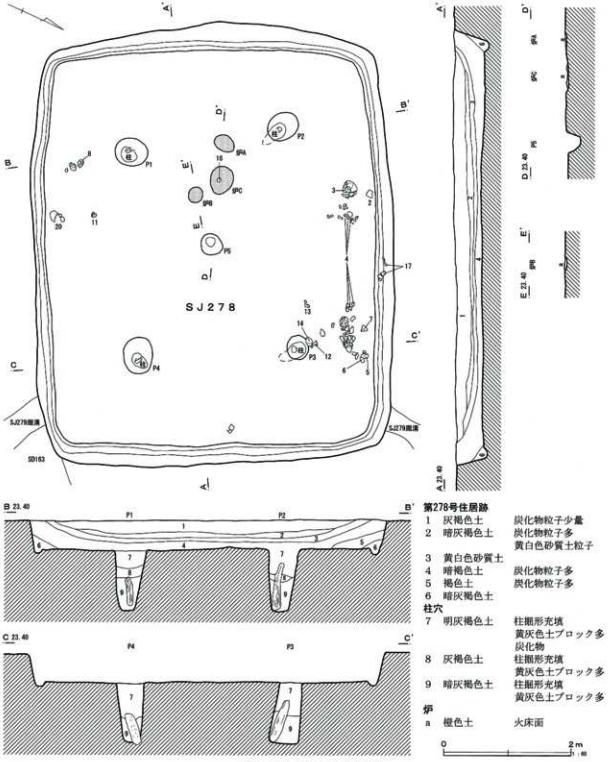
第278号住居跡（第177図）

M20グリッドに位置する。重複する遺構との新旧関係は、確認面の違いから第636号土壙よりも古く、また覆土の堆積状況から第279号住居跡周溝よりも新しい。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。主軸長6.97m、幅5.73m、確認面からの深さ0.39～0.55mを測る。主軸方位は、N－116°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。いずれも掘り込みが深く、下半部から柱材の残欠（ムクノキ）が検出されている。掘形では歪な配置を示すが、柱痕は均整の取れた長方形に配置されている。

炉は、3基検出されている。いずれも地床炉である。住居中央付近西側にまとまって位置している。炉Aは南北0.36m×東西0.23mの楕円形に、炉B



第177図 **第278号住居跡**

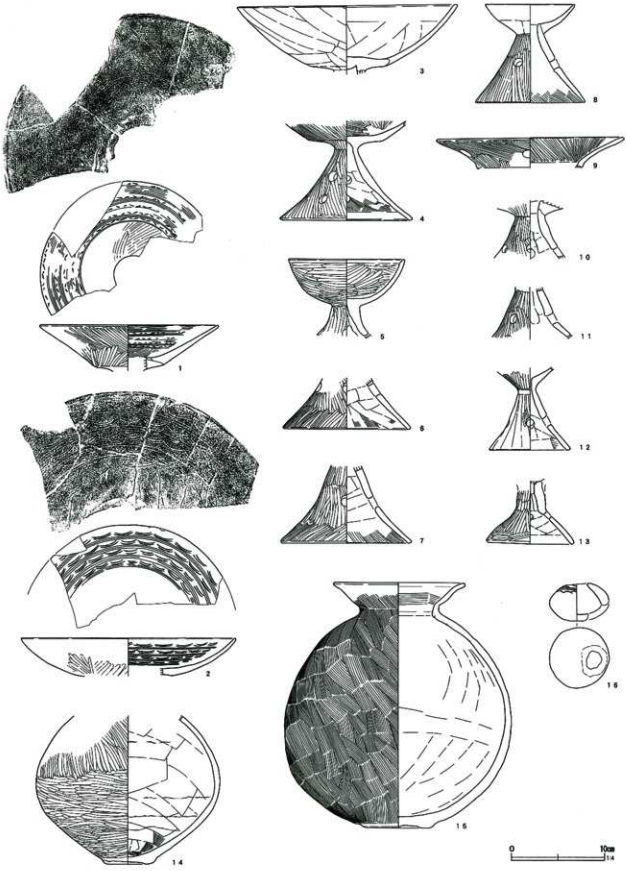
は南北0.23m×東西0.24mの円形に、炉Cは南北0.37m×東西0.45mの倒卵形に、それぞれ焼土化している。

壁溝は、全周する。幅0.17～0.35m、床面からの深さ0.05～0.09mほどである。

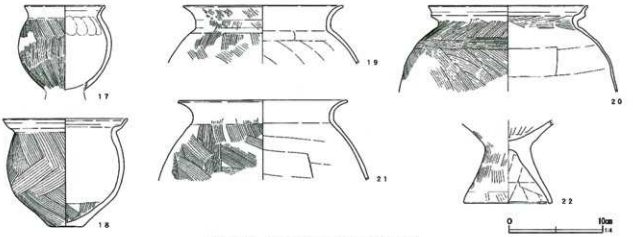
貯蔵穴は、付設されていない。

ピットは、P5が住居中央部に位置している。主柱穴と比較すると、浅い掘形である。

遺物は、北壁中央付近および南壁西半付近に集中した分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類



第178図　**第278号住居跡出土遺物（1）**



第179図　**第278号住居跡出土遺物（2）**

第55表　**第278号住居跡出土遺物観察表**（第178･179図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	(19.2)	(4.8)		AI	B	灰白	20	坏部内面に横線文＋鋸歯文5単位
2	高坏	(22.7)	(4.0)		BCI	C	橙	20	№8　坏部内面に横線文＋波状文4単位
3	高坏	22.9	(7.2)		ABE	A	浅黄橙	60	№7
4	高坏		(10.5)	13.4	AEG	A	灰白	60	№9･11　円孔3＋3（上下2列）
5	高坏	12.2	(8.1)		DI	A	にぶい橙	80	№14　円孔（4）
6	高坏		(5.4)	(13.0)	AE	A	橙	15	№15　円孔（4）
7	高坏		(8.1)	(13.6)	ACE	A	橙	20	№13　円孔（4）
8	器台	(9.6)	10.4	11.4	ABDE	B	橙	85	№5　円孔3
9	器台	(19.6)	(3.2)		E	A	浅黄橙	10	受部円孔（4）
10	器台		(6.1)		AE	A	橙	15	円孔4
11	高坏		(5.4)		AB	A	淡黄	20	№2　円孔3＋3（上下2列）
12	器台		(8.6)	8.2	ABE	A	橙	60	№16　円孔4　赤彩痕
13	器台		(6.6)	9.0	AEG	A	橙	40	№19　円孔4
14	壺		(15.7)		AEG	A	にぶい橙	40	№17
15	壺	13.8	25.9	6.6	ABCEGI	B	にぶい赤橙	75	
16	小型無頸壺	2.2	4.0		ADE	A	にぶい橙	100	№6　斜線列文＋横線文＋波状文 焼成後穿孔
17	小型台付甕	(8.4)	(9.0)		AB	A	橙	70	№10　被熱による部分的な黒変
18	小型甕	(13.0)	11.5	3.6	ABC	B	明赤褐	60	
19	甕	(16.8)	(6.2)		CD	A	黒	5	外面に煤付着
20	甕	(17.0)	(9.1)		CG	A	浅黄橙	10	№1
21	甕	(17.7)	(8.4)		C	B	にぶい黄橙	5	
22	台付甕		(8.8)	(9.0)	ACD	B	にぶい黄橙	10	

1367.5g、高坏・器台類205.4gの図化できない微細な破片も出土している。

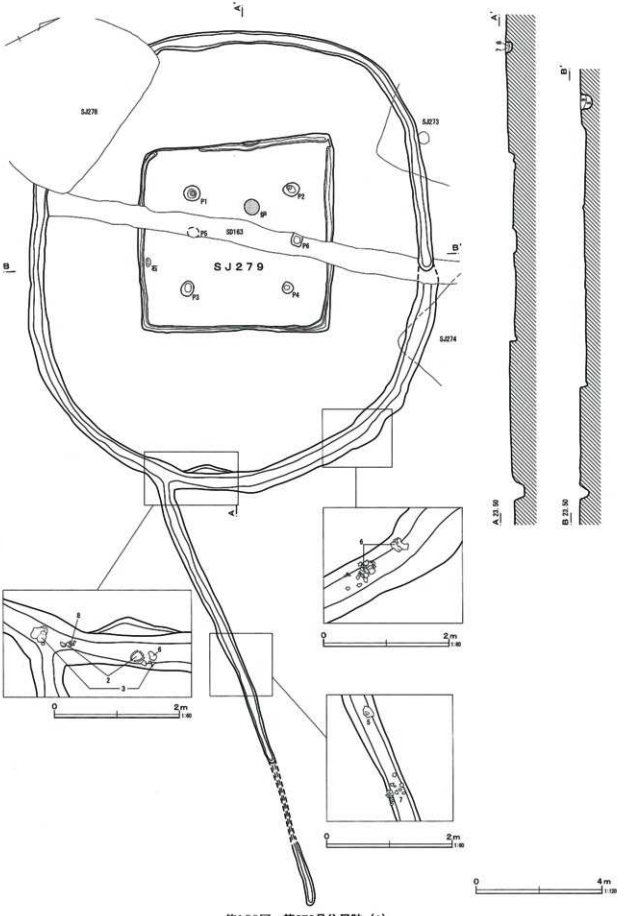
第178図1・2は、高坏である。1は、坏部の内面に横線文と鋸歯文が交互に5単位施されている。2は、坏部内面に横線文＋波状文が交互に4単位施文されている。

第178図16は、小型の無頸壺である。肩部には斜線列文・横線文・波状文が施されている。また、下半部には焼成後に穿孔が行われている。

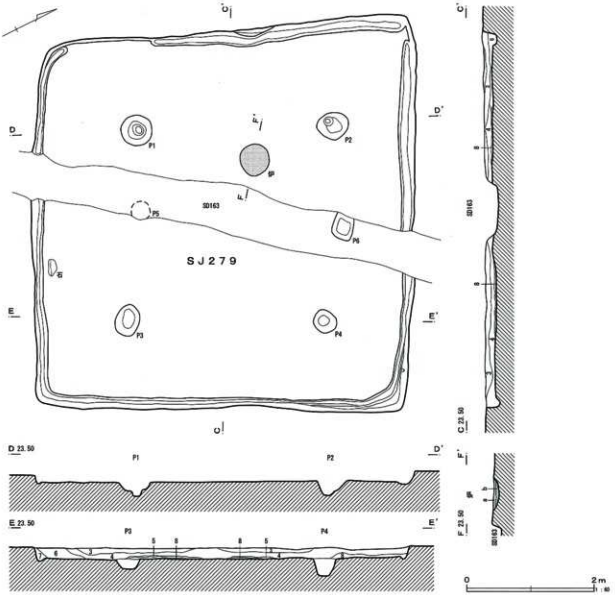
第279号住居跡（第180・181図）

竪穴の周囲に溝が巡っている。住居跡で、L20・L21・L22・M20・M21・M22グリッドに位置する。古代の第254号溝跡に攪乱され、周溝部が第272・273・274・278号住居跡と重複する。確認面の違いや覆土の堆積状況から、新旧関係は第273・278号住居跡が新しく、第272・274号住居跡は明確ではない。

周溝は、住居竪穴部を楕円形に巡り、東側に東西方向に走る直線的な溝が付設されている。全体的に



第180図　**第279号住居跡（1）**



第279号住居跡

1　暗褐色土　周溝覆土　黄灰色粘土粒子多
2　暗褐色土　周溝覆土　黄灰色粘土ブロック若干
3　暗褐色土　灰白色粘土粒子多　炭化物粒子少
4　黄褐色粘土＋黄灰色粘土＋黒灰色土
5　炭化物層
6　黒褐色土　炭化物粒子・灰白色粘土粒子少
7　明褐色土＋赤灰色粘土
8　黄灰色土＋黒褐色土
9　黄灰色土

炉

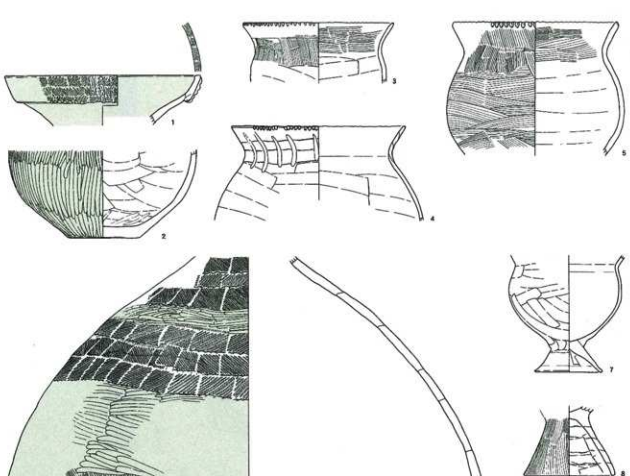
a　赤褐色土　火床面　焼土ブロック多
b　灰褐色土　撹形　炭化物粒子少

第181図　**第279号住居跡（2）**

は、「Q」字形を呈している。円周部から直線的に延びる部分は、先端に向かって標高が下がり、その先方には調査区を縦断する水路跡が位置している。このような状況から、周溝は排水を意図して設置されたことが予想される。特に直線的に延びた部分の意義は大きい。周溝円周部の規模は、南北径12.7m、東西径14.48m、直線部は一部途切れるものの延長14.3mにおよぶ。溝幅は0.42～0.80m、確認面からの深さ0.20～0.40mを測る。

竪穴部は平面方形である。主軸長5.94m、幅6.18m、確認面からの深さ0.11～0.17mを測る。主軸方位は、N－62°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は6本柱で、このうちP1・P2・P3・P



第182図　**第279号住居跡出土遺物**

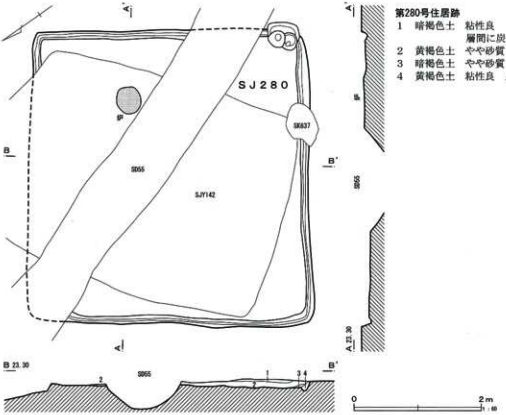
第56表　**第279号住居跡出土遺物観察表**（第182図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	壺	(20.7)	(5.2)		AE	A	にぶい橙	5	周溝部　棒状浮文+単節(LR+RL+LR)+列点文　赤彩
2	壺		(9.2)	7.2	AEI	A	橙	20	No5・8　外面赤彩
3	甕	(15.9)	(6.4)		BGH	C	褐	5	No3・10
4	甕	(18.4)	(10.0)		AC	C	橙	10	周溝部
5	甕	(17.3)	(14.2)		BGH	A	にぶい橙	15	No16
6	壺		(33.6)		BCEGI	B	浅黄	30	No11・14・15　ハケ→縄文(無節Lr+Rl+結節文)→ミガキ→赤彩
7	小型台付甕		(12.2)	7.0	AEG	A	橙	70	No17　胴部外面に煤付着
8	台付甕		(7.3)	9.5	BCGHI	B	にぶい橙	10	No6

4・P6の5本が検出されている。P6に対応するP5は、第254号溝跡によって削平されている。主軸に沿って3本×2列に配置され、P1・P2の底面には柱痕が認められる。

炉は、地床炉である。住居中央付近西側に位置している。南北0.45m×東西0.52mの円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

壁溝は、西壁南半部および北西コーナー部で途切れるほかは全周する。幅0.11～0.24m、床面からの深さ0.02～0.06mほどである。



第183図　**第280号住居跡**

貯蔵穴は、付設されていない。

遺物は、竪穴部よりも周溝部にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類5742.2g、高坏・器台類151.0g、鉢・椀類17.1gの図化できない微細な破片も出土している。

第182図１は、複合口縁の壺である。口縁部外面には単節ＬＲ・単節ＲＬ・単節ＬＲの縄文が施文された後に、キザミが施された４本（３本残・１本剥離）を一単位とする棒状浮文が貼付されている。また、口唇部には単節ＬＲの縄文、口縁部下辺には棒状工具による列点文が施されている。また無文部には、赤彩もみられる。

第182図６は、大型の壺である。外面には、ハケ調整の後、肩部から胴部上半に無節Ｌｒ＋結節とＲ１＋結節文の縄文が、交互に３列２段が施文されている。その後、ミガキ調整が行われ、無文部には赤彩が施されている。内面は風化が著しく、調整痕は不明瞭である。

第280号住居跡（第183図）

Ｍ22・Ｍ23グリッドに位置する。重複する第637号土壙よりも古い。

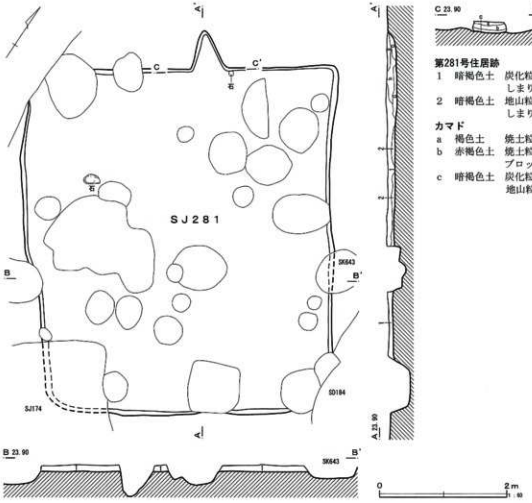
平面形態は、方形である。主軸長4.56ｍ、幅4.42ｍ、確認面からの深さ0.04～0.14ｍを測る。主軸方位は、Ｎ－125°－Ｅを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

炉は、地床炉である。住居南東部に位置している。南北0.38ｍ×東西0.44ｍの円形に焼土化している。

壁溝は、全周する。幅0.08～0.20ｍ、床面からの深さ0.02～0.06ｍほどである。

主柱穴・貯蔵穴は、検出されていない。

遺物は、壺・甕類37.4gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。



第184図 **第281号住居跡**

第281号住居跡（第184図）

N13・N14グリッドに位置する。カマドが付設された時期の住居跡で、重複する第282号住居跡よりも新しい。

平面形態は、方形である。主軸長5.41m、幅4.88m、確認面からの深さ0.06～0.13mを測る。主軸方位は、N－34°－Wを指す。

カマドは、北壁の中央付近の東よりに付設されている。主軸長0.70m、焚口付近の幅0.48mである。袖は造り付けられ、芯材には土師器甕を伏せた状態で用いている。火床面は緩やかな凹面を呈して煙道部へ至り、煙道部は端部に向かって傾斜し、端部壁は外傾気味に立ち上がる。

主柱穴・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

第282号住居跡（第185図）

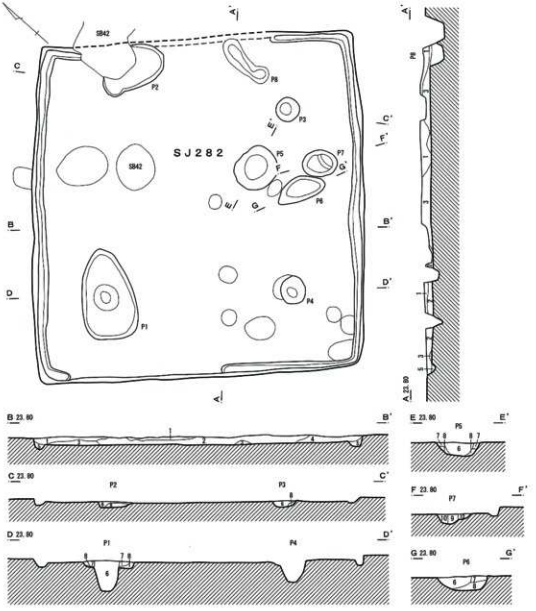
N13・N14グリッドに位置し、重複する第281号住居跡よりも古い。また確認面の高さの違いから、第644号土壙よりも新しい。

平面形態は、方形である。長軸長5.35m、短軸長5.28m、確認面からの深さ0.06～0.10mを測る。長軸の方位は、N－47°－Eを指す。覆土は自然堆積である。

主柱穴は、P1・P3・P4の3本である。これに対応する主柱穴は発見されていない。

炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、北東壁中央付近では不明であるが、南西壁北半部を除いて全周する。幅0.10～0.26m、床面からの深さ0.02～0.05mほどである。



第282号住居跡

1　暗褐色土　炭化物粒子・焼土粒子・地山粒子微量
2　黄褐色土　黄褐色砂質ブロック
3　灰褐色土　黄褐色土ブロック・灰褐色土
4　暗褐色土　地山粒子・ブロック
5　暗褐色土　焼土粒子　炭化物粒子　しまり弱

柱穴

6　暗褐色土　柱抜取痕　焼土粒子微量　炭化物粒子　黄褐色土粒子
7　褐色土　柱据形充填　炭化物粒子　黄褐色土粒子・ブロック
8　灰褐色土　柱据形充填　灰褐色粘土　黄褐色土粒子・ブロック
9　暗褐色土　柱痕　焼土粒子　地山粒子
10　暗褐色土　焼土粒子　地山粒子やや多

0　2m

第185図　**第282号住居跡**

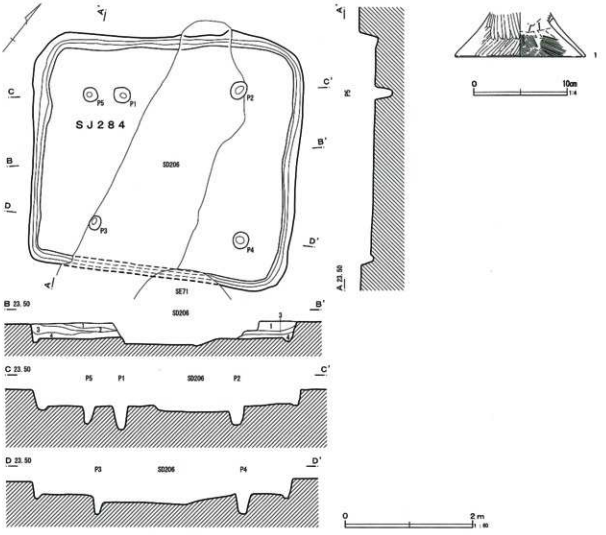
遺物は、壺・甕類570.4g、高坏・器台類26.2gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第284号住居跡（第186図）

N17・O17グリッドに位置する。重複する古代の遺構による攪乱が著しい。

平面形態は、方形である。南北長3.80m、東西長4.20m、確認面からの深さ0.20～0.26mを測る。南北軸の方位は、N－32°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。全体的に東側によった配置がみられる。主柱穴P1



第284号住居跡
1　暗褐色土　黄灰色粘土ブロック多
2　暗褐色土　黄灰色粘土ブロック多
3　暗褐色土　炭化物少　黄灰色粘土粒子微
4　黄灰色土＋暗褐色土　炭化物粒子少

第186図　**第284号住居跡・出土遺物**

第57表　**第284号住居跡出土遺物観察表**（第186図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏		(4.7)	(14.0)	ADE	A	にぶい黄橙	10	円孔1のみ確認

の西側に隣接するP5も、主柱穴と同様の規模をもつ。

炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、全周する。幅0.16～0.30m、床面からの深さ0.02～0.05mほどである。

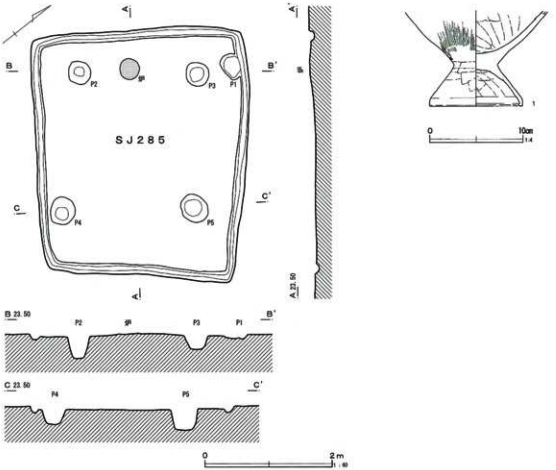
遺物は、図示したほかに壺・甕類77.4gの図化できない微細な破片も出土している。

第285号住居跡（第187図）

N19グリッドに位置し、床面がほぼ露呈した状態で確認されている。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。主軸長3.85m、幅3.34mを測る。主軸方位は、N－52°－Wを指す。

主柱穴は、P2・P3・P4・P5の4本である。



第187図　**第285号住居跡・出土遺物**

第58表　**第285号住居跡出土遺物観察表**（第187図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	台付甕		(10.1)	10.0	ABDE	A	にぶい黄橙	15	胴部外面に煤付着

南西によった配置を示す。

炉は、地床炉である。西壁際付近に位置している。南北0.31m×東西0.34mの円形に焼土化している。

壁溝は、全周する。幅0.12～0.17m、床面からの深さ0.01～0.06mほどである。

貯蔵穴は、付設されていない。

ピットは、P1が北壁北西コーナー付近の壁際に位置している。主柱穴と比較すると、平面規模は遜色ないが、浅い掘形である。

遺物は、図示したほかに壺・甕類430.0gの図化できない微細な破片も出土している。

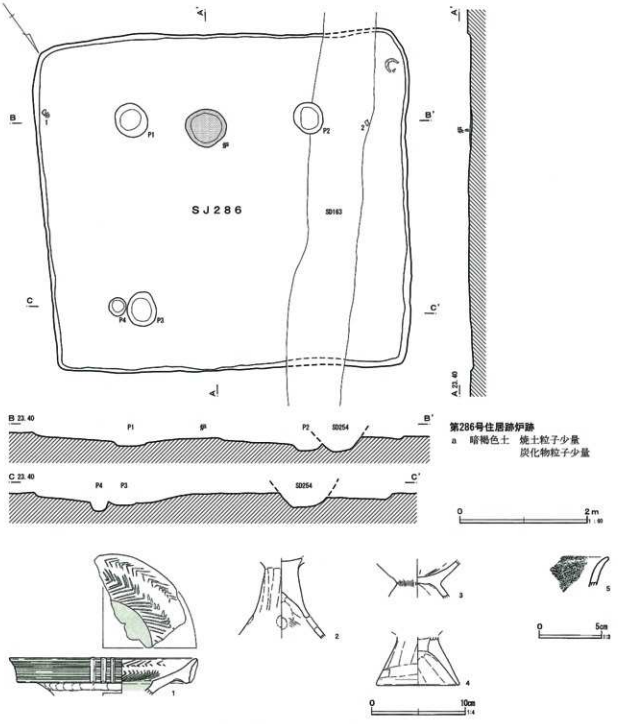
第286号住居跡（第188図）

M20・N20グリッドに位置し、床面がほぼ露呈したような状態で確認されている。

平面形態は、方形である。主軸長5.31m、幅5.81mを測る。主軸方位は、N－146°－Wを指す。

主柱穴は、P1・P2・P3の3本である。これに対応する主柱穴は、第254号溝跡によって攪乱されている。いずれの主柱穴も、掘形は浅い。またP3に隣接するP4は、主柱穴の補助的な機能も想定される。

炉は、地床炉である。住居中央付近の南西に位置している。南北0.53m×東西0.64mの円形に焼土化している。



第188図 **第286号住居跡・出土遺物**

第59表 **第286号住居跡出土遺物観察表**（第188図）

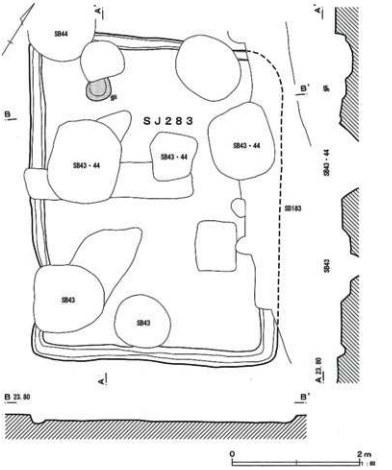
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	壺	(19.7)	(4.0)		ABE	B	にぶい橙	10	No3 棒状浮文 鋸歯状刺突文4段 赤彩
2	高坏		(8.4)		AB	A	灰白	20	No2 円孔4 風化・調整痕不明瞭
3	台付甕		(4.0)		ABD	A	橙	5	
4	台付甕		(5.2)	(8.5)	BC	A	にぶい橙	5	

壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

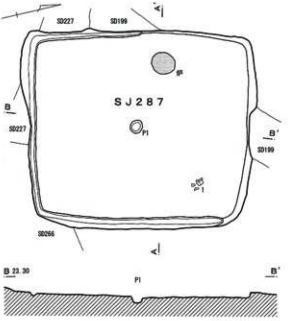
遺物は、西・南コーナー付近にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類921.5g、高坏・器台類45.1gの図化できない微細な破片も出土している。

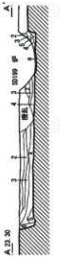
第188図１は、パレス壺である。垂下・拡張口縁部の外面には、擬凹線文が施文されている。また、３本１単位とする棒状浮文が貼付されているが、単位数は不明である。内面には、ハケ工具による刺突文が鋸歯状・矢羽根状に４段施されている。

第188図５は、単口縁壺の口縁部片である。外面には、ヘラ描きと思われる鋸歯文が施されている。胎土には石英・雲母が含まれ、焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈している。



第189図　**第283号住居跡**

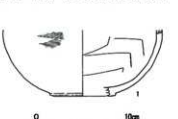




第287号住居跡

1　灰褐色土　粘質　炭化物粒子多
2　黒色土　やや粘質　炭化物層　平板な炭化物層　屋根支え素材か？
3　黄褐色土　粘質　しまり強
4　暗褐色土　粘質　炭化物粒子　黒褐色土ブロック　自然堆積
5　黄褐色土　粘質　壁面材の支え？
6　暗褐色土　粘質　炭化物層　壁面材か？

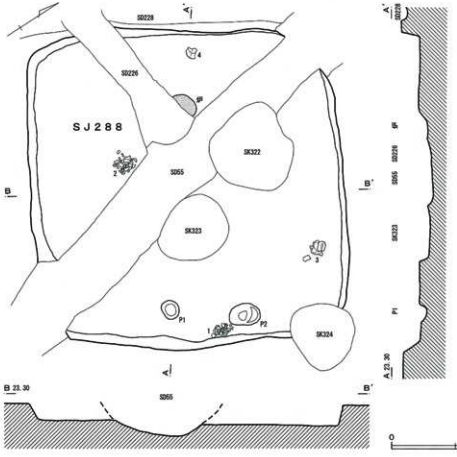
炉
a　暗茶褐色土　粘質　直下に火床面の焼土化

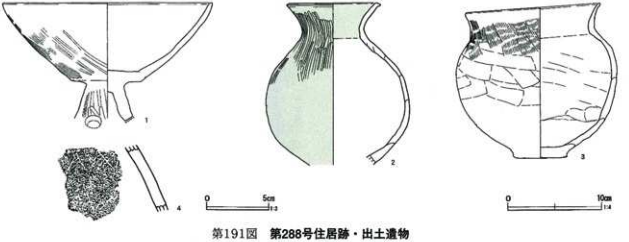


第190図　**第287号住居跡・出土遺物**

第60表　**第287号住居跡出土遺物観察表**（第190図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	壺		(7.0)	(7.0)	AE	B	橙	15	№1





第191図　**第288号住居跡・出土遺物**

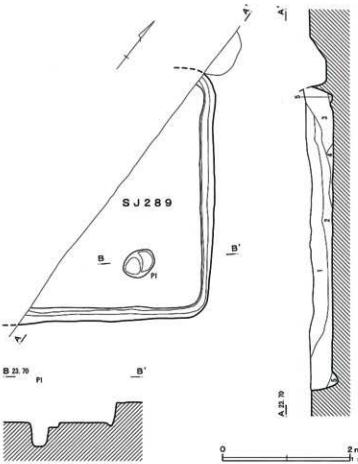
第61表　**第288号住居跡出土遺物観察表**（第191図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	22.2	(12.2)		ABCGI	B	にぶい橙	60	№3　円孔(3)内面風化
2	小型壺	9.2	(17.1)		ABCEGI	B	黄灰(赤彩下)	80	№4　外面・口縁部内面赤彩
3	小型甕	14.0	15.9(16.4)	5.0	ABCEGI	B	黄灰	85	№1　器面剥離顕著

第283号住居跡（第189図）

N14・N15グリッドに位置する。床面がほぼ露呈した状態で確認され、重複する第648号土壙との新旧関係は明確ではない。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。主軸長5.09m、幅3.91mを測る。主軸方位は、N－



第289号住居跡
1　灰褐色土　黒色土ブロック　炭化物粒子
2　暗褐色土　炭化物粒子多
3　灰褐色土　白色粒子・粘土粒子やや多　炭化物
4　灰白色土　粘質土
5　明褐色土

第192図　**第289号住居跡**

32°－Wを指す。

炉は、地床炉である。住居北西部に位置している。径0.38mの円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

壁溝は、全周する。幅0.14～0.27m、床面からの深さ0.03～0.06mほどである。

主柱穴・貯蔵穴は、検出されていない。

遺物は出土していない。

第287号住居跡（第190図）

N22グリッドに位置する。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。主軸長3.12m、幅3.70m、確認面からの深さ0.25mを測る。主軸方位は、N－77°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

炉は、地床炉である。古代の第199号溝跡の攪乱から辛うじて逃れている。西壁に極端によって位置し、南北0.38m×東西0.34mの円形に焼土化している。

主柱穴・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、東壁北東コーナー～南壁～西壁南半部に沿って巡っている。幅0.06～0.24m、床面からの深さ0.02～0.04mほどである。

ピットは、住居跡のほぼ中心にP1が発見されている。規模が小さく、機能は不明である。

遺物は、図示したほかに壺・甕類599.6g、高坏・器台類17.7gの図化できない微細な破片も出土している。

第288号住居跡（第191図）

N22・N23グリッドに位置する。古代の遺構による攪乱が著しい。

平面形態は、方形である。主軸長5.08m、幅4.86m、確認面からの深さ0.24～0.37mを測る。主軸方位は、N－60°－Wを指す。

炉は、地床炉である。第226号溝跡によって南半部が掘削されている。住居中央付近より西壁側によって位置し、径0.43mの円形に焼土化している。

主柱穴・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

ピットは、炉に相対する東壁際にP1・P2が列んでいる。位置関係から、出入り口施設に伴う機能が推定される。

遺物は、炉周辺や北壁・東壁の壁際にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類1743.3g、高坏・器台類69.9gの図化できない微細な破片も出土している。

第191図4は壺の胴部上半文様帯の破片である。外面に鋸歯文がヘラ描きされ、上部は赤彩されてい

る。胎土には石英・雲母が含まれ、焼成は普通である。色調はにぶい黄橙色を呈している。

第289号住居跡（第192図）

N15・O15グリッドに位置する。

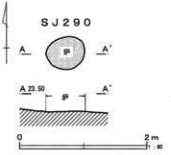
平面形態が方形の住居跡の、東半部のみが検出されている。規模は、一辺4.0m前後と推定される。確認面からの深さは、0.29～0.33mを測る。検出された東辺の方位は、N－36°－Wを指す。

主柱穴はP1のみで、ほかは未検出部分に位置している。

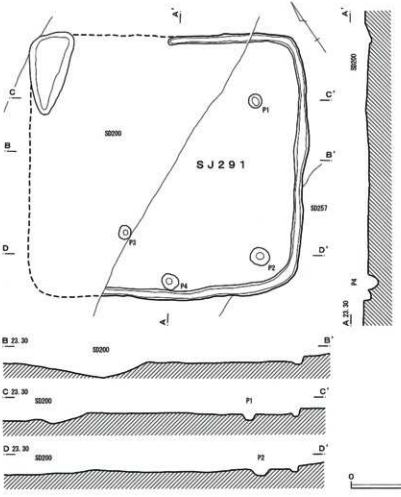
炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、全周する。幅0.16～0.23m、床面からの深さ0.04～0.11mほどである。

遺物は、壺・甕類83.9g、高坏・器台類9.6gが出



第193図　**第290号住居跡**



第194図　**第291号住居跡・出土遺物**

第62表　**第291号住居跡出土遺物観察表**（第194図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		(3.8)	(8.6)	BCEFGI	B	にぶい橙	5	

土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第290号住居跡（第193図）

O20グリッドに位置する。

南北0.50m×東西0.62mの楕円形に焼土化した、地床炉のみが確認されている。住居跡の平面形態・規模や、主柱穴・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、不明である。

遺物は、炉とその周辺から壺・甕類201.6gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第291号住居跡（第194図）

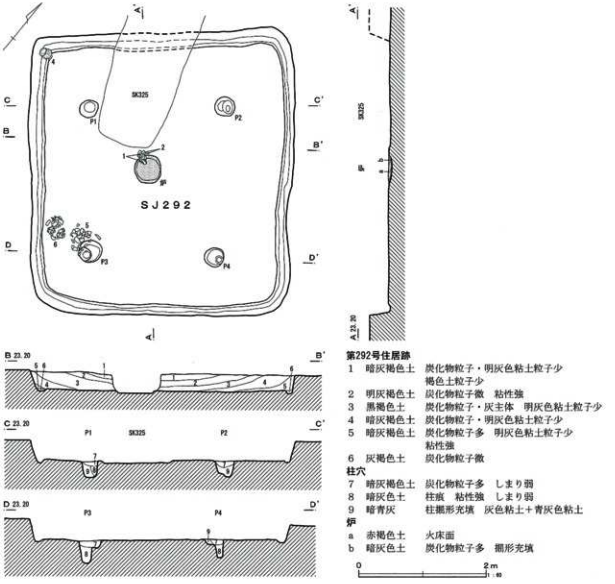
O21・O22グリッドに位置する。床面が露呈した状態で確認され、北半部は古代の溝跡による攪乱が著しい。

平面形態は、方形である。南北長4.16mを測る。南北軸の方位は、N－60°－Eを指す。東西長は4.5m前後と推定される。

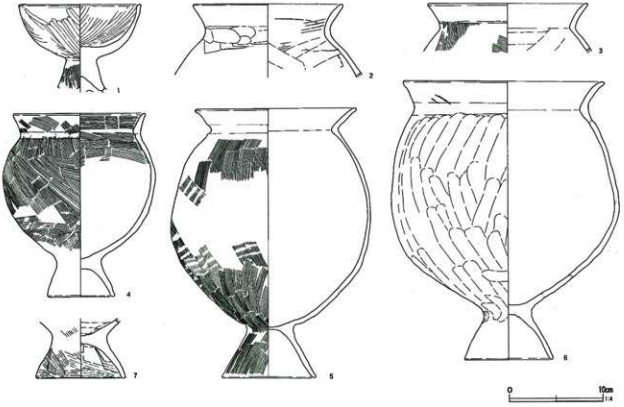
主柱穴・炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、検出部では全周する。幅0.10～0.22m、床面からの深さ0.03～0.05mほどである。

ピットは、P1・P2・P3・P4の4本である。



第195図 **第292号住居跡**



第196図　**第292号住居跡出土遺物**

第63表　**第292号住居跡出土遺物観察表**（第196図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	12.8	(　9.1)		AB多	B	にぶい黄橙	60	№2　円孔4
2	甕	(15.6)	(　7.8)		AE	A	浅黄橙	5	№2　口縁部外面に煤付着
3	甕	(16.7)	(　5.2)		AB	A	にぶい黄橙	5	
4	台付甕	13.8	19.3	6.6	BCFG	B	にぶい黄橙	95	№1　外面胴部下半に二次的被熱による器面剥離
5	台付甕	16.9	28.4	9.8	ABCEGI	B	淡橙	95	№3　外面に煤付着
6	台付甕	21.0	29.3	(9.2)	BCEFGI	B	暗褐＋にぶい橙	95	№48　外面胴部中位に煤付着痕
7	台付甕		(　6.3)	9.5	ADE	A	褐灰	10	外面に煤付着

このうち、P1・P2が主柱穴の候補ではあるが、位置や規模からは認定できない。また南壁中央の壁際に位置しているP4には、出入り口施設に伴う機能が推定される。

遺物は、少ない。図示したほかに、壺・甕類64.5gの微細な破片を出土している。

第292号住居跡（第195図）

O23・O24グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。主軸長4.45m、幅4.19m、確認面からの深さ0.23～0.33mを測る。主軸方位は、N－42°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

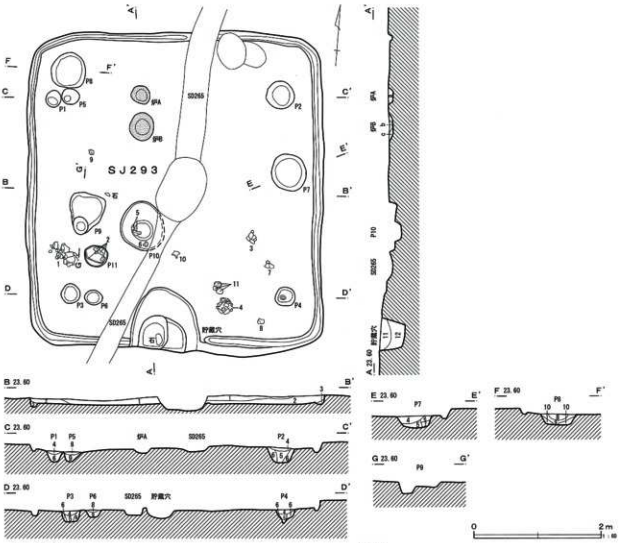
主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本柱である。西よりに配置されている。覆土の堆積状況から、上層には柱抜取痕の埋没層、下層には柱痕・柱掘形充填層が確認できる。

炉は、地床炉である。住居中央付近の西側に位置している。南北0.45m×東西0.44mの円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

壁溝は、全周する。幅0.14～0.25m、床面からの深さ0.02～0.06mほどである。

貯蔵穴は、付設されていない。

遺物は、炉周辺・西コーナー部・南コーナー付近に集中している。図示したほかに、壺・甕類881.6g、



第293号住居跡

1	暗褐色土	炭化物粒子少	褐色土粒子・ブロック
2	暗褐色土	炭化物粒子少	明灰色粒子の帯状堆積
3	暗灰褐色土	炭化物粒子微	

柱穴

4	暗褐色土	柱抜取痕	炭化物粒子少　明灰色粘土粒子・ブロック
5	暗褐色土	柱痕	炭化物粒子少　灰色粘土多　しまり欠
6	暗灰褐色土	柱掘形充填	暗灰色粘土粒子・ブロック多
7	明灰色土	柱掘形充填	灰色粘土ブロック
8	灰褐色土	柱掘形充填	炭化物粒子微 明灰色粘土粒子・ブロック多
9	暗灰褐色土	柱掘形充填	炭化物粒子少　しまり欠
10	明褐色土	柱掘形充填	灰色粘土ブロック

貯蔵穴

11	暗灰褐色土	炭化物粒子少	明灰色粘土粒子少 しまり欠
12	灰褐色土	炭化物粒子少	明灰色粘土粒子多

炉A

a	黒色土	炭化物・灰層	焼土粒子多

炉B

b	赤褐色土	火床面	
c	暗黄褐色土	掘形	炭化物粒子多　灰色粘土少

第197図　**第293号住居跡**

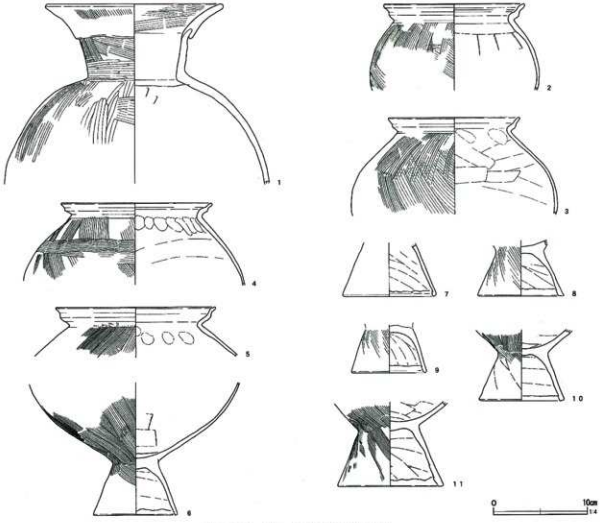
高坏・器台類17.2g、鉢・椀類4.1gの図化できない微細な破片も出土している。

第293号住居跡（第197図）

P13・P14・Q13・Q14グリッドに位置する。確認面の高さの違いから、重複する第662号土壙の方が新しい。

平面形態は、方形である。主軸長4.98m、幅4.51m、確認面からの深さ0.04～0.13mを測る。主軸方位は、N－5°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

炉は2基検出され、いずれも地床炉である。住居の北北西部に、南北に列んで位置している。北側の



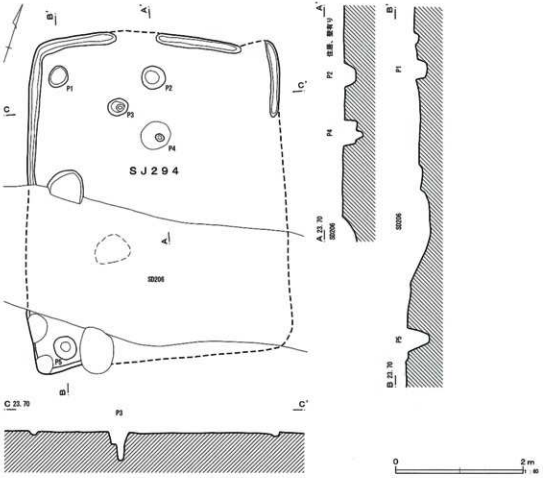
第198図　**第293号住居跡出土遺物**

第64表　**第293号住居跡出土遺物観察表**（第198図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	壺	18.5	(19.0)		BCD	A	橙	35	№13
2	甕	(14.6)	(9.2)		AE	B	暗褐	10	
3	甕	(13.9)	(10.3)		AEG	B	にぶい黄橙	10	№7　外面～口縁部内面に煤付着
4	甕	15.8	8.7		ACDE	A	浅黄橙	20	№3　外面～口縁部内面に煤付着 内面にタール状付着物
5	甕	(16.8)	(5.3)		ABEF	A	灰白	5	
6	台坏甕		(13.8)	9.0	CI	A	にぶい黄橙	15	№9
7	台付甕		(5.6)	(10.0)	ABE	B	橙	5	風化・調整痕不明瞭
8	台付甕		(5.9)	9.2	AE	A	橙	10	№1
9	台付甕		(5.0)	(8.0)	ABE	B	灰黄	5	№10
10	台付甕		7.5	9.0	ABE	A	にぶい橙	10	№8　胴部外面に煤付着
11	台付甕		8.9	11.2	AE	A	にぶい橙	10	№5　胴部外面に煤付着

炉Aは、南北0.26m×東西0.30mの円形に、南側の炉Bは、南北0.44m×東西0.38mの円形に焼土化し、いずれも浅い掘形をもつ。

主柱穴は、覆土の堆積状況からP1・P2・P3・P4の4本と推測される。覆土の堆積状況から、上層には柱抜取痕の埋没層、下層には柱痕・柱掘形充填層が確認できる。主柱穴P1・P3の東側に隣接するP5・P6は、覆土の内容が主柱穴とは異なっている。それでも、P5・P6の位置を重視すると、炉が2基検出されていることを考慮に入れて、住居



第199図　**第294号住居跡**

の建て替えを検討する必要がある。主柱穴P1・P3とP5・P6の覆土の違いは、住居の建て替えに対応して主柱穴がP5→P1・P6→P3に移設され、この際に、建て替え以前の主柱穴P5・P6が人為的に埋め戻された結果と捉えることもできる。

貯蔵穴は、炉と相対する南壁中央の壁際に付設されている。浅い南北0.97m×東西1.10mの窪みの南壁際に、南北0.54m×東西0.76m、深さ0.38mの掘り込みをもつ。

壁溝は、貯蔵穴が付設されている部分を除き、全周する。幅0.12～0.17m、床面からの深さ0.02～0.06mほどである。

ピットは、P7・P8・P9・P10・P11が検出されている。主柱穴に比べ、平面規模が大きい。このなかで、東壁の中央壁際に位置しているP7には出入り口施設に伴う機能が、北西コーナー部に位置しているP8には貯蔵穴的な機能が想定できる。

遺物は、住居南半部に集中している。図示したほかに、壺・甕類487.3gの図化できない微細な破片も出土している。

第294号住居跡（第199図）

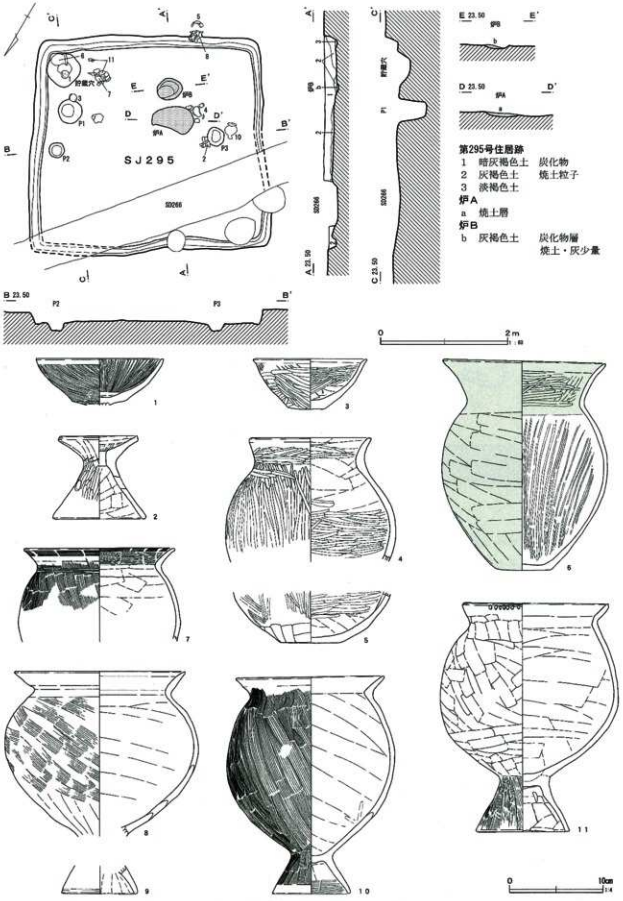
P15・P16グリッドに位置する。床面が露呈した状態で確認され、北半部は古代の溝跡による攪乱が著しい。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。長軸長5.28m、短軸長4.00mを測る。長軸の方位は、N－20°－Wを指す。

主柱穴・炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、途切れながら北半部が全周する。幅0.10～0.20m、深さ0.02～0.06mほどである。

ピットは、P1・P2・P3・P4・P5が検出されている。位置関係や対応するピットの欠如から、



第200図 **第295号住居跡・出土遺物**

第65表　**第295号住居跡出土遺物観察表**（第200図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	13.3	(3.9)		E	A	にぶい黄橙	65	No12
2	器台	8.2	8.7	10.0	ADE	A	橙	70	No4
3	小型鉢	11.8	5.3	4.0	E	A	にぶい黄橙	95	No13
4	壺	12.5	(13.0)		AE	A	橙	45	No2
5	壺		(5.4)	6.4	EG	A	橙	30	No6
6	甕	17.2	22.3	5.8	ABD	A	にぶい橙	95	No11　外面～口縁部内面に赤彩
7	甕	(15.5)	(9.8)		ABE	A	にぶい黄橙	5	No10　外面に煤付着
8	台付甕	17.8	(17.4)		C	B	にぶい橙	80	No5
9	台付甕		(3.0)	8.2	ABE	A	橙	5	
10	台付甕	15.5	22.8	8.0	AB	A	浅黄橙	95	No1　外面に煤付着
11	台付甕	15.3	24.1	10.0	ABDE	A	にぶい黄橙	95	No8・9　胴部外面に煤付着

主柱穴と認定することはできない。

遺物は出土していない。

第295号住居跡（第200図）

P19グリッドに位置し、古代の溝跡による攪乱が著しい。

平面形態は、方形である。主軸長3.41m、幅3.51m、確認面からの深さ0.09～0.22mを測る。主軸方位は、N－149°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

2基の炉が、住居中央付近の南南西側に、南北に列んで検出されている。いずれも地床炉である。北側に位置している炉Aは、南北0.43m×東西0.67mの不整楕円形に焼土化している。南側に位置している炉Bは、南北0.34m×東西0.40mの楕円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

壁溝は、全周する。幅0.10～0.22m、床面からの深さ0.01～0.04mほどである。

貯蔵穴は、南東コーナー部に付設されている。平面円形の南北0.53m×東西0.53m、床面からの深さ0.16mの掘り込みをもつ。

ピットは、P1・P2・P3の3本である。位置的には、主柱穴と認定することができない。相対する位置関係にあるP2・P3は、2本柱穴の住居跡を想定した場合に主柱穴となるが、規模は小さい。

遺物は、炉・貯蔵穴の周辺に集中している。炉周辺には煮沸形態の甕が多く、貯蔵穴周辺には貯蔵形態の壺や供膳形態の高坏・椀が多い傾向にある。図示したほかに、壺・甕類730.3g、高坏・器台類10.1gの図化できない微細な破片も出土している。

第296号住居跡（第201図）

O20・O21・P20・P21グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。主軸長5.50m、幅5.50m、確認面からの深さ0.16～0.26mを測る。主軸方位は、N－40°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。覆土の堆積状況から、柱抜取痕の埋没層や柱痕・柱掘形充填層を判断することは難しい。

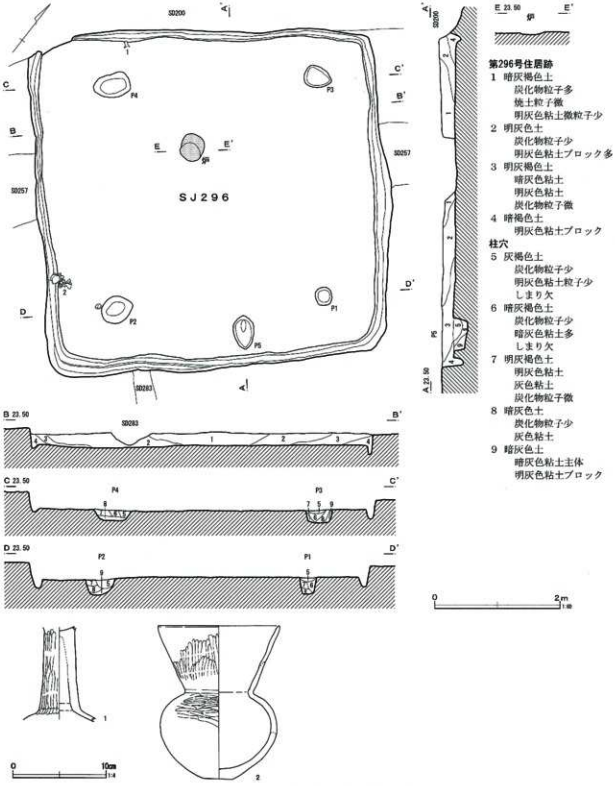
炉は、地床炉である。住居中央付近の北側に位置している。南北0.42m×東西0.36mの円形に焼土化している。

壁溝は、全周する。幅0.10～0.36m、床面からの深さ0.04～0.23mほどである。

貯蔵穴は、付設されていない。

ピットは、P5の1本のみである。炉跡に相対する南東壁中央付近の壁際に位置し、出入り口施設に伴う機能が想定される。

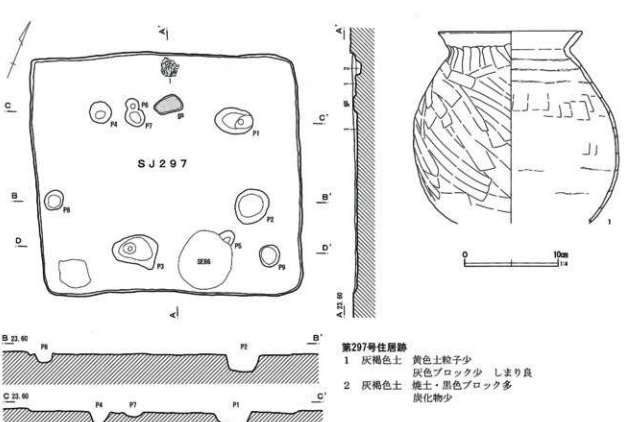
遺物は、南コーナー付近にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類1057.9gの図化できない微細な破片も出土している。



第201図　**第296号住居跡・出土遺物**

第66表　**第296号住居跡出土遺物観察表**（第201図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏		(9.6)		ABCEGI	B	淡橙	10	№3
2	坩	12.8	16.2	3.1	EGI	B	橙	90	№2　風化・調整痕不明瞭



第202図　**第297号住居跡・出土遺物**

第67表　**第297号住居跡出土遺物観察表**（第202図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	甕	15.0	(20.3)		ABCGI	B	にぶい橙	35	

第297号住居跡（第202図）

Q15・Q16グリッドに位置する。床面が露呈した状態で確認され、貼床がみられる。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。主軸長3.76m、幅4.26mを測る。主軸方位は、N－24°－Eを指す。

炉は、地床炉である。北壁によって位置している。南北0.26m×東西0.46mの不整楕円形に焼土化している。

壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

ピットは、P1・P2・P3・P4・P5・P6・P7・P8・P9の9本である。このうち主柱穴は、P1・P3が確実であるが、ほかは断定できない。

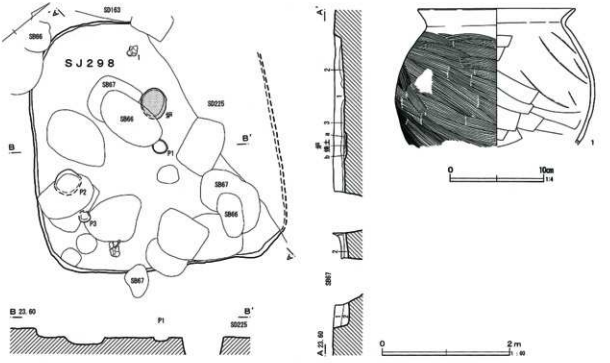
遺物は、炉の北側にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類72.3gの図化できない微細な破片も出土している。

第298号住居跡（第203図）

R16グリッドに位置し、重複する古代の遺構による攪乱が著しい。

平面形態は、方形である。主軸長3.90m、確認面からの深さ0.16mを測り、幅は3.8m前後と推定される。主軸方位は、N－54°－Wを指す。覆土は自然堆積である。

炉は、地床炉である。住居中央付近の北西壁側に



第298号住居跡
1　灰褐色土　焼土・炭化物少　しまり良
2　灰褐色土　炭化物・粘土ブロック少　しまり良
3　灰褐色土　焼土・炭化物多　しまり良

炉
a　暗褐色土　焼土・炭化物多　粘土ブロック少　しまり良
b　暗褐色土　焼土・炭化物多　しまり良

第203図　**第298号住居跡・出土遺物**

第68表　**第298号住居跡出土遺物観察表**（第203図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	甕	16.7	(14.6)		AE	A	橙	30	№2

位置している。南北0.49m×東西0.40mの円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

壁溝・貯蔵穴は、付設されていない。

ピットは、P1・P2・P3の3本である。このうち、南コーナー付近に位置しているP2・P3は、主柱穴の可能性が残されている。住居の中心部P1の機能は不明である。

遺物は、少ない。図示したほかに、壺・甕類15.4gの図化できない微細な破片も出土している。

(3) 第3群の住居跡

第3群は、調査区中央を南北に貫く水路跡南部の西側に分布している一群である（第204図）。範囲は、水路跡から西側に張り出した谷部南側にあたり、調査区の南東部に位置する。住居跡の軒数は、18軒を数える（第299・329～345号住居跡）。

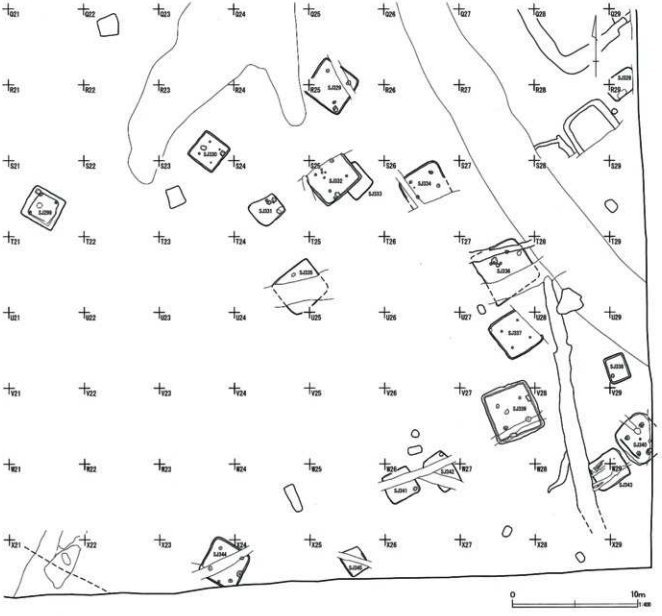
第3群でも、住居跡同士の重複は少なく、第332号住居跡・第333号住居跡の重複例のみである。

住居跡の平面形態は、方形を基本とする。なかには、南北・東西に長軸をもつ長方形もみられる。

規模は、第1群と同様に、一辺6m以上、一辺5～6m、一辺5m未満のものに大別される。

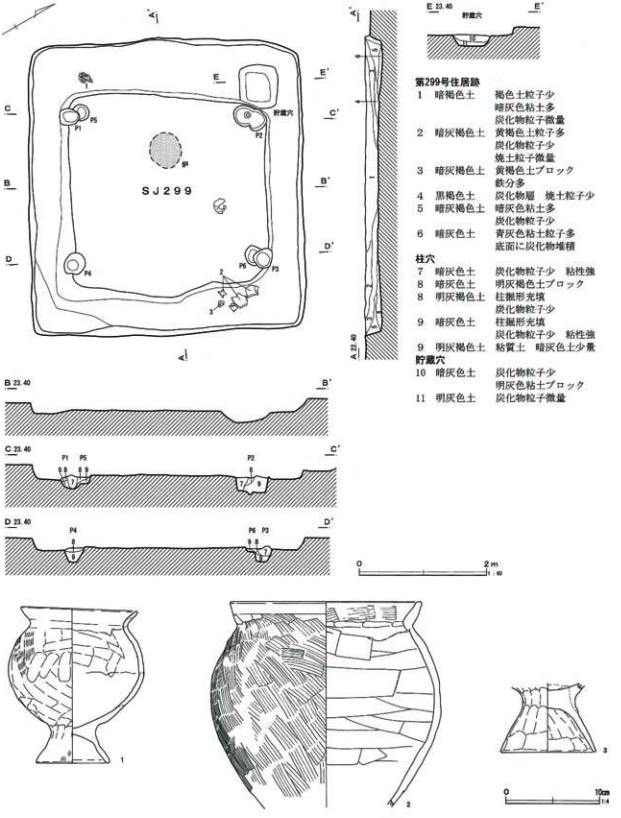
南北軸の方向は、水路跡を意識した方向が主体である。また軸方向の振幅差も小さい。

上記の要素のなかで、平面形態と規模に相関性がみられる。一辺が4m以上の方形住居跡と、一辺5m以下の長方形住居跡に分割できる。いわば、大型の方形住居跡と、小型の長方形住居跡が混在した状況として捉えられる。



第204図　**第3群の住居跡分布図**

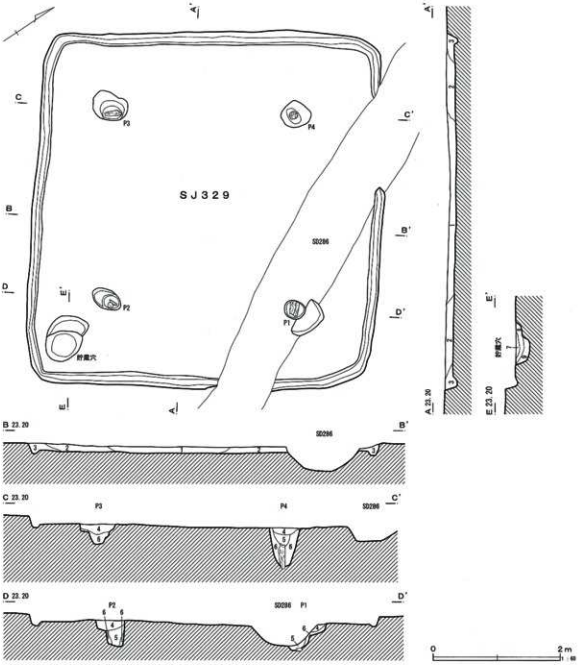
このような平面形態と規模の相関性から、群内における二重構造が垣間見られる。と同時に、住居跡同士の重複率の低さや南北軸の振幅差の小さささからは、集落展開の高い計画性を窺うことができる。



第205図 **第299号住居跡・出土遺物**

第69表　**第299号住居跡出土遺物観察表**（第205図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	小型台付甕	12.1	16.3	7.6	BCEFGI	B	にぶい赤褐	85	№1
2	甕	20.1	(21.7)		ABDE	A	橙	45	№3
3	台付甕		7.2	10.0	BGI	B	にぶい橙	10	№4



第329号住居跡
1　灰褐色土　炭化物粒子微
　　暗灰色粘土ブロック
2　暗灰色土　炭化物粒子多
　　明灰色砂質土
3　暗灰色土　炭化物粒子微
　　明灰色粘土ブロック

柱穴
4　暗灰色土　柱抜取痕　炭化物粒子微
　　灰色粘土粒子少
5　暗灰色土　柱痕　炭化物粒子多
　　しまり欠　粘性強
6　暗青灰色土　柱根形充填　炭化物粒子微量
　　灰白色粘土粒子微量　しまり良

貯蔵穴
7　灰白色土　粘土層
　　（層間に炭化物の堆積）
8　暗灰色土　暗灰色粘土＋明灰色粘土
　　炭化物粒子少
9　暗灰色土　炭化物粒子多

第206図　**第329号住居跡**

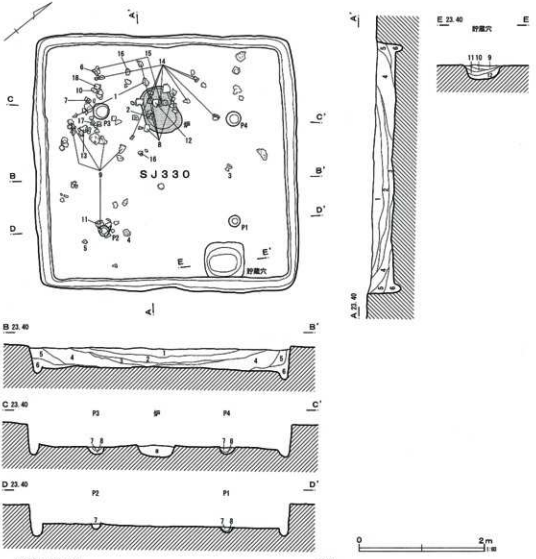
第299号住居跡（第205図）

S21グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。掘形は、住居周辺部が幅の広い壁溝状に掘り込まれるタイプである。主軸長4.70m、幅4.44m、確認面からの深さ0.20mを測る。主軸方位は、N－60°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。覆土の堆積状況に、柱痕・柱掘形充填層が確認できる。

炉は、地床炉である。住居中央付近の西側に位置している。南北0.50m×東西0.56mの範囲が焼土



第330号住居跡

1　暗灰褐色土
　焼土粒子微　炭化物粒子　明灰色粘土粒子少
2　明灰褐色土
　炭化物粒子微　灰色粘土　暗褐色土粒子少
3　黒色土　灰・炭化物層
4　暗灰色土
　炭化物粒子・明灰色粘土粒子少
5　暗灰色土
　炭化物粒子微　明灰色粘土粒子多
6　暗灰色土
　炭化物粒子多　明灰色粘土少
　焼土粒子少　しまり欠

柱穴

7　暗灰色土
　炭化物粒子多　灰色粘土粒子少　しまり欠
8　灰白色土
　柱掘形充填　炭化物粒子微　暗灰色粘土少

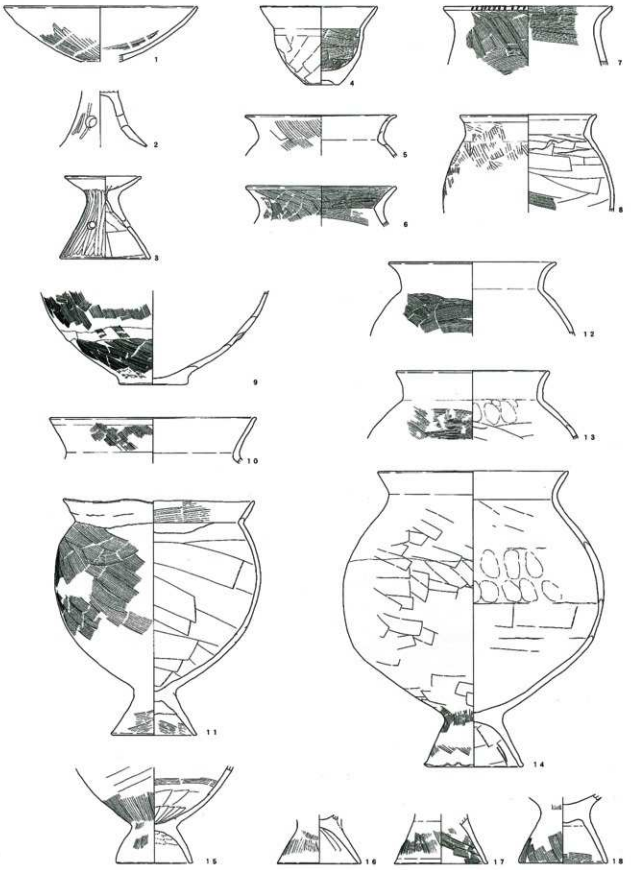
貯蔵穴

9　暗灰色土　炭化物粒子・暗灰色粘土多
10　灰白色粘土層
11　暗灰色土　炭化物粒子
12　暗灰色土
　炭化物粒子少　灰色粘土多

炉

a　黒色土　炭化物＋灰　焼土粒子微

第207図　**第330号住居跡**



第208図　**第330号住居跡出土遺物**

化している。

貯蔵穴は、住居北西コーナー部に付設されている。南北0.61m×東西0.68mの方形で、床面からの深さ0.18mを測る。底面は平坦で、壁は外傾する。

遺物は、北東コーナー部および南西コーナー部にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類450.8g、鉢・椀類6.8gの図化できない微細な破片も出土している。

第329号住居跡（第206図）

Q24・Q25・R24・R25グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。長軸長5.64m、短軸長5.58m、確認面からの深さ0.17mを測る。長軸の方位は、N－53°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。P1は第286号溝跡に大半が壊されている。覆土の堆積状況から、上層には柱抜取痕の埋没層、下層には柱痕・柱掘形充填層が確認できる。また柱痕部には、柱材の残欠が発見されている。

炉は、検出されていない。

壁溝は、全周する。幅0.12～0.24m、床面からの深さ0.02～0.06mほどである。

貯蔵穴は、南コーナー部に付設されている。二段に掘り込まれ、南北0.60m×東西0.80mの平面楕円形である。床面からの深さは、最大0.23mを測る。

遺物は、壺・甕類677.5g、高坏・器台類32.7gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第330号住居跡（第207図）

R23・S23グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。主軸長4.00m、幅4.18m、確認面からの深さ0.30～0.41mを測る。主軸方位は、N－52°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。いずれも平面規模が小さく、浅い。

炉は、地床炉である。住居中央付近の西側に位置している。南北0.58m×東西0.74m、床面からの深さ0.21mの掘形をもち、炭化物・灰が堆積していた。

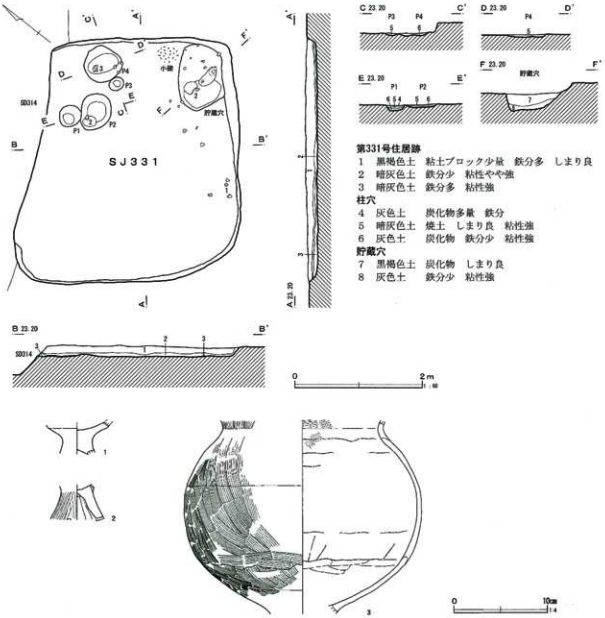
壁溝は、全周する。幅0.14～0.26m、床面からの深さ0.01～0.13mほどである。

貯蔵穴は、炉と相対する東コーナー付近の南東壁際に付設されている。南北0.62m×東西0.56mの平面方形で、床面からの深さ0.22mを測る。覆土には暗灰色粘土が多くみられる。

遺物は出土量が多く、住居西半部に集中している。図示したほかに、壺・甕類5397.5gの図化できない微細な破片も出土している。

第70表　**第330号住居跡出土遺物観察表**（第208図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(20.6)	(5.9)		ABCEGI	B	灰白	20	№56·71
2	高坏		(5.9)		ACEI	B	赤褐	20	№68　円孔3　風化·調整痕不明瞭
3	器台	8.0	8.8	9.5	AB多I	A	にぶい黄橙	95	№87　円孔3
4	小型鉢	12.3	8.4	3.5	ABEG	A	橙	95	№4　被熱による黒色化
5	甕	(15.8)	(4.2)		ABEGI	B	淡黄橙	5	№2
6	甕	(15.6)	(4.3)		ADE	A	にぶい黄橙	5	№46
7	甕	(18.0)	(6.2)		B多EI	A	にぶい黄橙	5	№41
8	甕	14.3	(10.3)		ABDEI	A	淡黄	20	№53·65·69·72·80
9	壺		(9.9)	7.2	ABCEGI	B	にぶい橙	25	№3·17·20·22·60　外面に煤付着
10	甕	(21.6)	(4.8)		ABGI	B	にぶい橙	5	№93　風化·調整痕不明瞭
11	台付甕	(20.2)	24.8	9.0	BDEI	B	にぶい黄橙	90	№3
12	甕	(17.6)	(7.8)		ABCEG	B	にぶい黄橙	5	№74
13	甕	(16.0)	(7.2)		ABE	B	淡黄橙	5	№29
14	台付甕	(20.2)	31.1	10.0	ABEI	A	淡黄	80	№50·59·73·76·78·82·84·86　外面に煤付着
15	台付甕		(10.1)	8.0	ACEG	B		15	№51·77　外面暗灰　内面にぶい黄橙
16	台付甕		(5.2)	8.8	ABDEI	B	にぶい黄橙	10	№62
17	台付甕		(5.2)	(10.0)	ABDEI	B	にぶい黄橙	5	№35
18	台付甕		(7.0)	9.2	BCGI	B	にぶい黄橙	10	№92



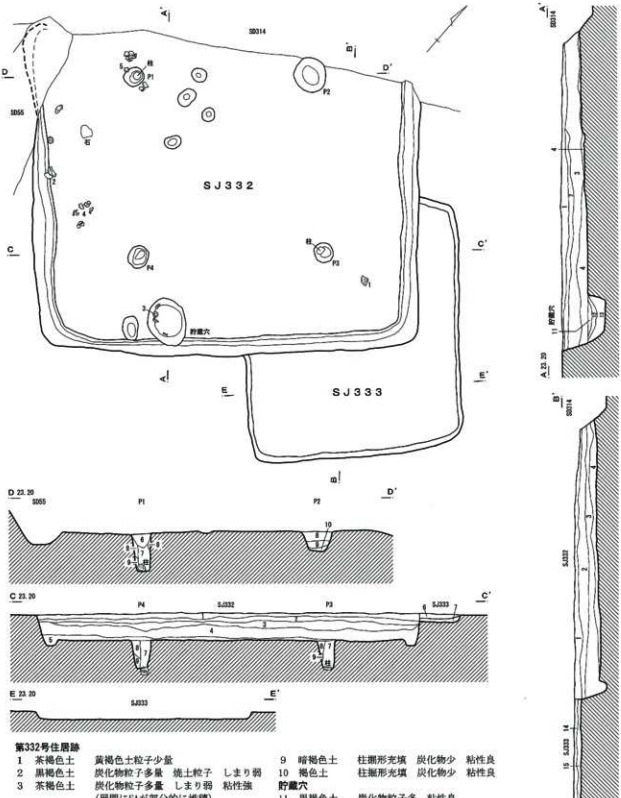
第209図 **第331号住居跡・出土遺物**

第71表 **第331号住居跡出土遺物観察表**（第209図）

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	高坏		(3.4)		E	B	にぶい黄橙	15	№3
2	高坏		(3.6)		A多BE	A	灰白	15	Pit2 №1 円孔3
3	台付甕		(20.5)		AFI	A	にぶい黄橙	30	№5 貯蔵穴 胴部外面中位に煤付着

第72表 **第332号住居跡出土遺物観察表**（第211図）

番号	器 種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色 調	残存率	備 考
1	高坏		(5.2)	10.5	ABE	A	にぶい黄橙	30	№17 円孔3
2	小型壺		(4.1)	4.0	B	A	橙	30	№8
3	小型壺	(4.6)	6.4	4.3	ABI	A	浅黄橙	50	№14
4	甕	(19.6)	(7.7)		ADE	B	灰黄褐	5	№9 外面に全体煤付着
5	台付甕		(5.8)	7.4	DEI	B	にぶい黄橙	10	№2



第332号住居跡

1　茶褐色土　黄褐色土粒子少量
2　黒褐色土　炭化物粒子多量　焼土粒子　しまり弱
3　茶褐色土　炭化物粒子多量　しまり弱　粘性強
（層間にFA が部分的に堆積）
4　茶褐色土　炭化物微量　粘性強
5　暗茶褐色土　黄褐色粒子・炭化物多量　粘性強

柱穴

6　黒褐色土　柱抜取痕　炭化物粒子多　粘性良
7　灰褐色土　柱痕　しまり弱　粘性強　柱材残欠
8　暗褐色土　柱掘形充填　炭化物多　粘性良
9　暗褐色土　柱掘形充填　炭化物少　粘性良
10　褐色土　柱掘形充填　炭化物少　粘性良

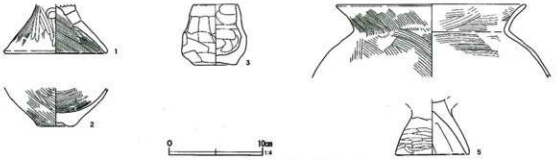
貯蔵穴

11　黒褐色土　炭化物粒子多　粘性良
12　暗褐色土　炭化物粒子少　粘性良
13　暗褐色土　炭化物粒子多　粘性良

第333号住居跡

14　暗茶褐色土　黄褐色粒子微量　粘性強
15　茶褐色土　炭化物粒子・焼土粒子微量　粘性強

第210図　**第332・333号住居跡**



第211図　**第332号住居跡出土遺物**

第331号住居跡（第209図）

S24グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。長軸長3.84m、短軸長3.6m前後、確認面からの深さ0.15mを測る。長軸の方位は、N－51°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。

主柱穴・炉・壁溝は、検出されていない。

貯蔵穴は、東コーナー部に付設されている。南北0.74m×東西1.05mの平面不整方形で、床面からの深さ0.43mを測る。底面は緩やかな凸面を呈している。

ピットは、P1・P2・P3・P4の4本が検出されているが、いずれも浅い。また貯蔵穴の西側には、小礫が集中していた。

遺物は、住居北半部に分布している。図示したほかに、壺・甕類842.3g、高坏・器台類43.7gの図化できない微細な破片も出土している。

第332・333号住居跡（第210図）

R25・S24・S25グリッドに位置する。重複する2軒の住居跡である。覆土の堆積状況から、第332号住居跡の方が新しい。

第332号住居跡は北部が第314号溝跡によって削平されているが、平面形態は方形である。南北長5.5m前後、東西長6.08m、確認面からの深さ0.44mを測る。南北軸の方位は、N－40°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。平面規模に比べ、しっかりとした掘り込みをもつ。覆土の堆積状況から、上層には柱抜取痕の埋没層、下層には柱痕・柱掘形充填層が確認できる。またP1・P3・P4から、柱材の残欠が発見されている。炉は、検出されていない。壁溝は、全周する。幅0.14～0.39m、床面からの深さ0.04～0.10mほどである。貯蔵穴は、南壁際西半部に付設されている。南北0.78m×東西0.59mの平面楕円形で、床面からの深さ0.28mを測る。遺物は、主に住居西半部にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類2643.6g、高坏・器台類60.4gの図化できない微細な破片も出土している。

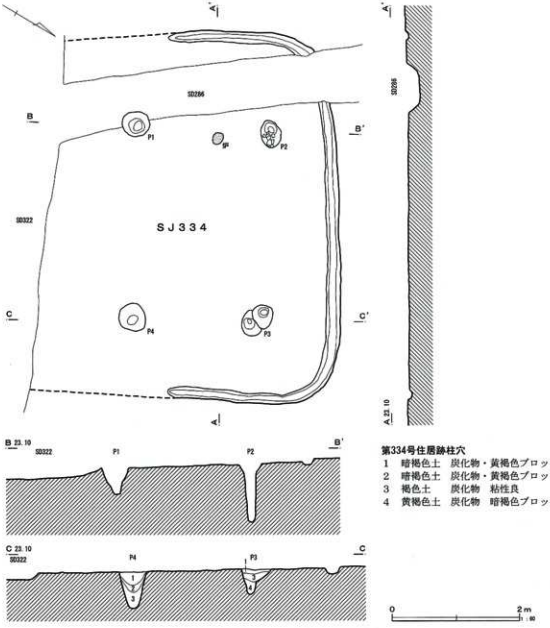
第333号住居跡は、平面形態が南北に長軸をもつ長方形である。長軸長3.98m、短軸長3.40m、確認面からの深さ0.08～0.10mを測る。長軸の方位は、N－44°－Wを指す。主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。遺物は、壺・甕類197.1g、高坏・器台類9.4gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第334号住居跡（第212図）

S26グリッドに位置する。床面が露呈された状態で確認されている。

重複する古代の溝跡の攪乱によって南壁付近は不明であるが、平面形態は方形である。主軸長5.86m、幅4.6m前後、主軸方位は、N－122°－Wを指す。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。平面規模に比べ、しっかりとした掘り込みをもつ。長方形に配置され、全体に北壁によって位置している。住居の平面形態も主柱穴配置と相似する東西に長軸をもつ長方形であった可能性もある。



第212図　**第334号住居跡**

炉は、地床炉である。住居北西部に位置している。南北0.16m×東西0.18mの範囲が焼土化している。

壁溝は、西壁中央付近～北壁～東壁中央付近に巡っている。幅0.13～0.24m、床面からの深さ0.02～0.08mほどである。

遺物は、壺・甕類571.9g、高坏・器台類111.5gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

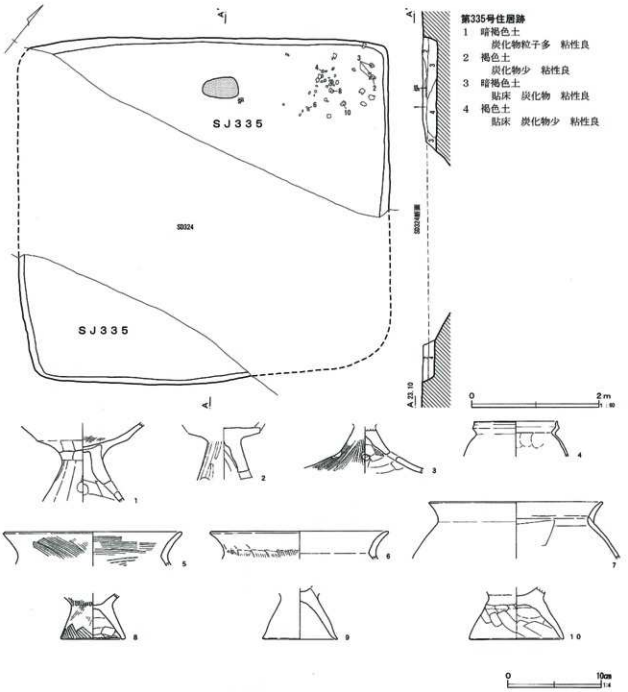
第335号住居跡（第213図）

T24・T25・U24グリッドに位置する。住居中央部には、古代の第324号溝跡が横断する。

平面形態は、方形である。主軸長5.46m、幅5.95m、確認面からの深さ0.08mを測る。主軸方位は、N－39°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。床面には、厚さ0.15～0.18mほどの貼床が施されている。

主柱穴・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

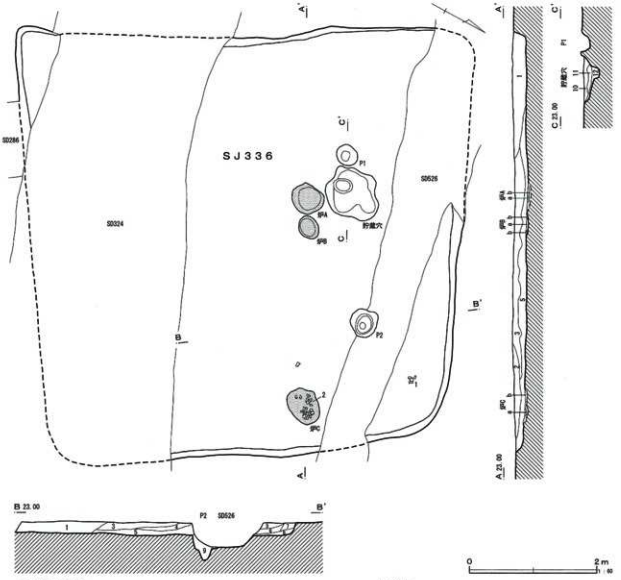
炉は、地床炉である。極端に北壁によった中央付近に位置している。南北0.33m×東西0.58mの楕円形に焼土化している。



第213図 **第335号住居跡・出土遺物**

第73表 **第335号住居跡出土遺物観察表**（第213図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏		(8.3)		BD	B	橙	25	円孔(4)
2	高坏		(5.4)		BEI	B	にぶい橙	25	№5 円孔3
3	高坏		(4.9)		AI	A	にぶい黄橙	25	№2・3・4 円孔4
4	小型甕	(8.8)	(3.7)		A	B	橙	5	№21 風化・調整痕不明瞭
5	甕	(18.5)	(3.6)		A多DE	A	にぶい橙	5	
6	甕	(18.7)	(3.0)		AB多	B	にぶい橙	5	№35 風化・調整痕不明瞭
7	甕	(18.0)	(6.0)		B多EG	B	にぶい黄橙	5	煤付着 風化・調整痕不明瞭
8	台付甕		(4.9)	6.7	ADE	B	明赤褐	10	№14 部分的に煤付着
9	台付甕		(5.4)	7.8	AE	B	橙	5	風化・調整痕不明瞭
10	台付甕		(5.5)	(10.0)	A多BDE	B	にぶい黄橙	5	№11 外面括れ部に煤付着



第336号住居跡

1　暗褐色土　黒褐色土ブロック少　粘性良　後世に地山の隆起？
2　褐色土　炭化物若干　黒褐色ブロック多　粘性良
3　黒褐色土　黒褐色ブロック・炭化物多　粘性良　埋戻し？
4　黒褐色土　炭化物多　褐色土ブロック含む　粘性良
5　黒褐色土　炭化物・褐色土ブロック少　粘性良
6　褐色土　黒褐色土ブロック　炭化物少　粘性良
7　黒褐色土　炭化物多　褐色土ブロック　粘性弱
8　褐色土　黒褐色土ブロック微　炭化物少　粘性良

柱穴

9　暗灰色土　炭化物多　褐色土ブロック微　黒褐色土ブロック　粘性良

貯蔵穴

10　暗褐色土　炭化物多　黒褐色ブロック
　　褐色土ブロック　粘性良
11　黒色土　炭化物層　褐色土ブロック微
12　褐色土　炭化物・黒褐色土ブロック
　　褐色土ブロック微　粘性良

炉

a　橙色土　炉床（地山の焼土化）　炭化物少
b　暗灰色土　炉床周囲の硬化

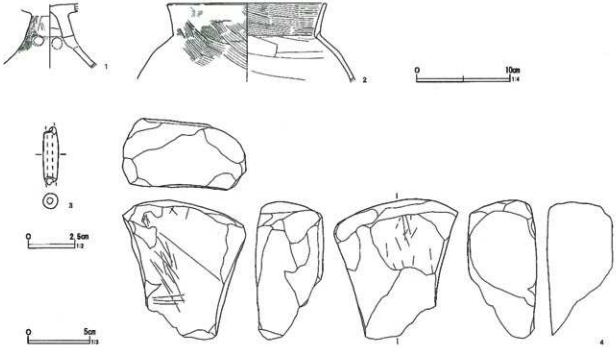
第214図　**第336号住居跡**

遺物は、北東コーナー部に集中している。図示したほかに、壺・甕類2401.0g、高坏・器台類52.9g、鉢・椀類33.7gの図化できない微細な破片も出土している。

第336号住居跡（第214図）

T27グリッドに位置する。古代の溝跡による攪乱が著しい。

平面形態は、方形である。主軸長6.68m、幅6.9m前後、確認面からの深さ0.17mを測る。主軸方位は、N－119°－Wを指す。覆土は自然堆積である。



第215図　**第336号住居跡出土遺物**

第74表　**第336号住居跡出土遺物観察表**（第215図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏		(6.7)		AE	A	浅黄橙	20	№6　円孔4
2	甕	(16.4)	(8.3)		AE	A	にぶい褐	10	№1・2・4　外面に煤付着

主柱穴は、P1・P2の2本が検出されている。これに対応する主柱穴は、第324号溝跡によって掘削されている。

3基の炉が検出され、いずれも地床炉である。炉A・炉Bは、住居中央付近の西北西に並んでいる。炉Aは、南北0.50m×東西0.50mの不整円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。炉Bは、南北0.32m×東西0.34mの円形に焼土化している。炉Cは、東壁際の中央やや北寄りに位置している。南北0.50m×東西0.54mの楕円形に焼土化している。

壁溝は、検出されていない。

貯蔵穴は、炉Aの北側に近接して付設されている。南北0.80m×東西0.78mの不整方形で、床面からの深さ0.24mを測る。底面にはピット状の掘り込みもみられる。

遺物は、炉Cおよび北東コーナー部に集中している。図示したほかに、壺・甕類599.4gの図化できない微細な破片も出土している。

第215図3は土錘で、両端を欠損する。残存長3.0㎝、最大径0.8㎝、孔径0.3㎝、残存重1.9gを測る。胎土には白色粒が含まれ、焼成は普通である。色調は橙を呈している。

第215図4は砥石で、石材は凝灰岩である。約二分の一を欠損し、現存長10.7㎝、幅6.0～10.0㎝、厚さ5.4㎝、重さ630.6gである。表面の欠損が著しく、研ぎ面の擦痕は不明瞭である。

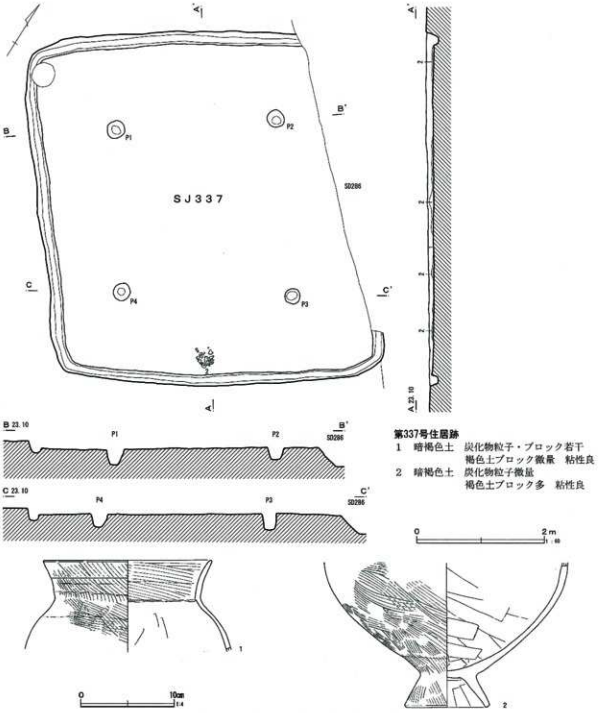
第337号住居跡（第216図）

U27グリッドに位置する。東壁部を古代の第286号溝跡に削平されている。

平面形態は、方形である。南北長5.62m、東西長5.4m前後、確認面からの深さ0.04～0.12mを測る。南北軸の方位は、N－38°－Wを指す。覆土は自然堆積である。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。住居と相似するやや歪な方形に配置されている。

炉・貯蔵穴は、検出されていない。



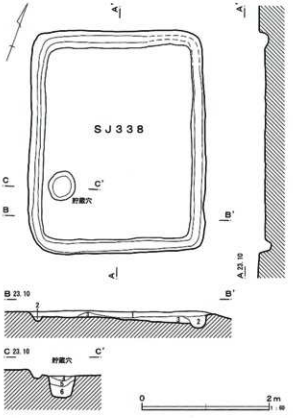
第216図 **第337号住居跡・出土遺物**

第75表 **第337号住居跡出土遺物観察表**（第216図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	甕	(17.8)	(9.7)		G	A	にぶい黄橙	5	内面口縁部～外面に煤付着
2	台付甕		(15.2)	8.2	EI	A	にぶい黄橙	25	No1 外面に煤付着

壁溝は、全周する。幅0.14～0.22m、床面からの深さ0.06～0.11mほどである。

遺物は南壁中央の壁際に分布している。図示したほかに、壺・甕類455.8gの図化できない微細な破片も出土している。



第338号住居跡
1　暗灰褐色土　炭化物粒子多　明灰色粘土ブロック
2　灰褐色土　粘性強
3　明灰色土　明灰色粘土多　炭化物粒子微量
貯蔵穴
4　黒色土　黒色灰＋炭化物層
5　暗灰色土　炭化物粒子・明灰色粘土粒子多
6　暗灰色土　炭化物＋暗灰色粘土

第338号住居跡（第217図）

U28・U29グリッドに位置する。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。長軸長3.52m、短軸長2.80m、確認面からの深さ0.12mを測る。長軸の方位は、N－21°－Wを指す。

主柱穴・炉は、検出されていない。

壁溝は、全周する。幅0.16～0.28m、床面からの深さ0.04～0.22mほどである。

貯蔵穴は、南西コーナー付近に付設されている。南北0.46m×東西0.42mの円形で、床面からの深さ0.36mを測る。最上層には炭化物が堆積していた。

遺物は、図示したほかに、壺・甕類34.9gの図化できない微細な破片も出土している。

第217図　**第338号住居跡・出土遺物**

第76表　**第338号住居跡出土遺物観察表**（第217図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	小型鉢	11.2	5.8	5.7	ABE	B	灰白	95	№6

第339号住居跡（第218図）

U27・V27・V28グリッドに位置する。

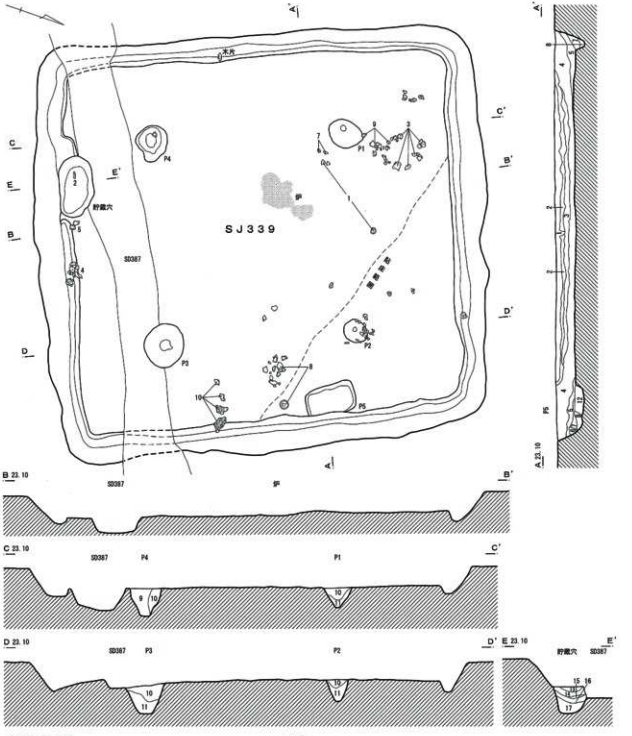
平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。主軸長6.56m、幅7.30m、確認面からの深さ0.26mを測る。主軸方位は、N－115°－Wを指す。覆土は自然堆積で、上半部は洪水層が堆積している。住居北東コーナー付近では貼床が顕著に施され、床面が堅緻である。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。覆土の堆積状況から、P4には柱痕、ほかは柱掘形充填層が確認できる。

炉は、地床炉である。住居中央付近西側に位置している。極めて不整な形を示す平面形態で、明瞭に分割することは難しいが、数基の炉の集合体とすることも可能である。南北0.85m×東西0.50mにおよぶ範囲が焼土化している。

壁溝は、全周する。幅0.30～0.68m、床面からの深さ0.04～0.18mほどである。

貯蔵穴は、南壁際の中央やや西部に付設されている。南北0.55m×東西0.96mの楕円形で、床面か



第339号住居跡

1　黒色土　シルト質粘土　灰色シルトブロック点在
2　灰色土　シルト質　ラミナのある有機質土（洪水層）
3　灰色土　シルト質粘土　炭化物多（洪水層）
4　黒色土　シルト質　灰色シルトブロック点在
5　黒色土　シルト質　灰色シルトブロック
6　緑灰色土　シルト質　有機質土　鉄分少
7　黒色土　シルト質粘土　灰色シルトブロック多
8　緑灰色土　シルト質粘土

柱穴

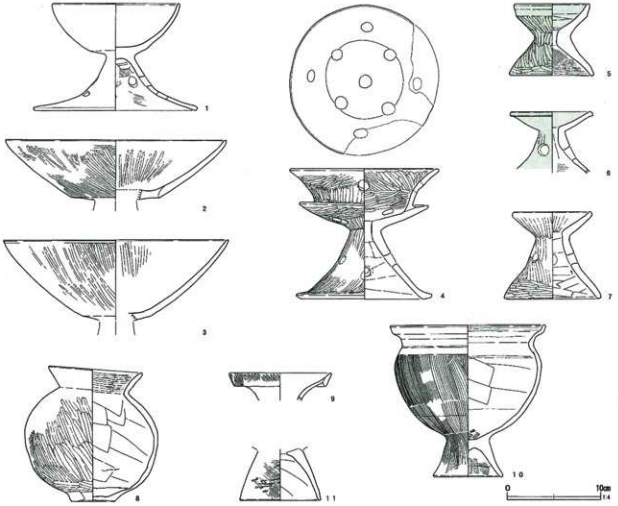
9　黒色土　シルト質粘土　炭化物多　灰色シルトブロック
10　緑灰色土　シルト質　炭化物少　しまり良　鉄分少
11　黒色土　シルト質粘土　炭化物少　黒色シルトブロック　鉄分少
12　黒色土　シルト質粘土　灰色シルトブロック点在　鉄分多

貯蔵穴

13　黒灰色土　シルト質粘土　炭化物粒子・ブロック多
14　黒灰色土　シルト質粘土　炭化物粒子多
15　灰黄色土　シルト質　灰色粘土質シルトブロック少
16　黒灰色土　粘土質シルト　炭化物粒子多
17　灰色土　シルト質粘土　炭化物粒子少

0　2m
1:60

第218図　**第339号住居跡**



第219図　**第339号住居跡出土遺物**

第77表　**第339号住居跡出土遺物観察表**（第219図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	(13.0)	11.3	(17.1)	ABE	A	にぶい黄橙	75	No6・7　円孔3+3(千鳥配置)風化・調整痕不明瞭
2	高坏	(23.4)	(6.3)		ABDE	A	浅黄橙	15	No22
3	高坏	23.8	(8.5)		ABD	B	にぶい黄橙	40	No2・3・4
4	器台	15.6	13.8	14.5	ADI	A	にぶい橙	90	No18　脚円孔2×2+2(千鳥配置)受円孔4+4(千鳥配置)
5	器台	(7.8)	7.6	8.9	EI	A	にぶい橙	80	No19　赤彩
6	器台	8.4	(6.5)		ABE	A	にぶい黄橙	65	赤彩
7	器台	(8.0)	9.2	10.2	AE	A	にぶい黄橙	70	No6　円孔3
8	小型壺	(9.8)	(8.5)	4.6	ABI	A	灰白	85	No12・13
9	小型壺	(10.7)	(4.4)		AB多	A	灰白	5	No3　縄文施文(単節RL)風化・調整痕不明瞭
10	小型台付甕	(16.2)	16.0	7.2	E	A	灰白	90	No14・15・16・17　外面胴部に煤付着
11	台付甕		(5.4)	(8.3)	ABDE	A	灰白	5	

らの深さ0.48mを測る。

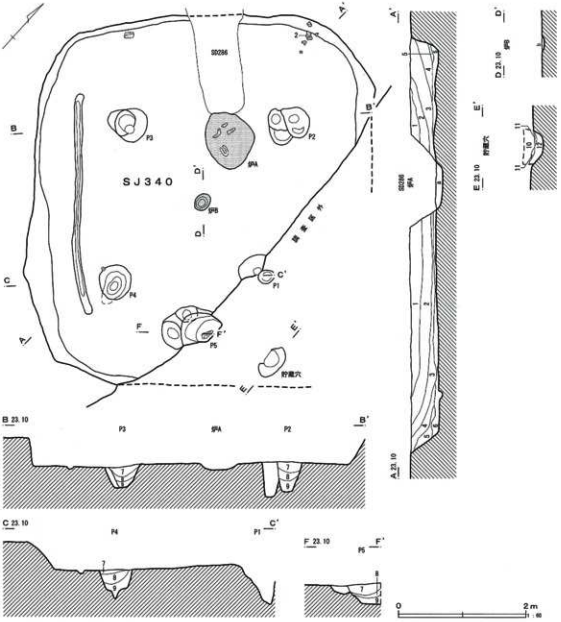
東壁際の中央やや北側には、P5が位置している。平面的な大きさは貯蔵穴と大差がないが、床面からの深さや覆土が異なっている。また、周囲の貼床が顕著な状況から、出入り口施設に伴う機能が想定される。

遺物は、住居北半部および貯蔵穴周辺に集中している。また、西壁中央付近壁溝には木片も残存していた。図示したほかに、壺・甕類1879.4g、高坏・器台類228.8g、鉢・椀類5.4gの図化できない微細な破片も出土している。

第219図4は、器台である。受け部には4孔ずつ

２列に円形スカシ孔が千鳥配置されている。脚部には、千鳥配置された２孔１単位１対と１孔１対の円形スカシ孔計６孔が穿たれている。

第219図９は、複合口縁の壺である。口縁部外面には、単節ＲＬの縄文が施文されている。



第340号住居跡

1　緑灰色土　シルト質　炭化物粒子少
2　灰色土　シルト質　炭化物粒子少　鉄分多
3　暗灰色土　シルト質　有材質土　炭化物粒子やや多　鉄分少
4　暗灰色土　有材質シルト　灰色細砂質シルトブロック多
　　炭化物粒子少　鉄分多
5　黒色　有材質シルト　炭化物多
6　暗灰色土　地山灰色シルトブロック＋３層有材質土ブロック
　　炭化物粒子多　焼土粒子少　貼床の剥離層？

柱穴

7　黒色土　有材質シルト　炭化物ブロック多
　　地山シルトブロック多
8　灰色土　有材質シルト　炭化物ブロック少
　　地山灰色シルトブロック＋暗灰色シルトブロック
9　黒色土　炭化物層

貯蔵穴

10　黒色土　シルト質粘土　有材質黒色シルト質粘土ブロック
　　灰色シルト地山ブロック　炭化物多
11　灰色土　シルト　炭化物少　鉄分少
12　黒色土　粘土質シルト　炭化物粒子・ブロック多

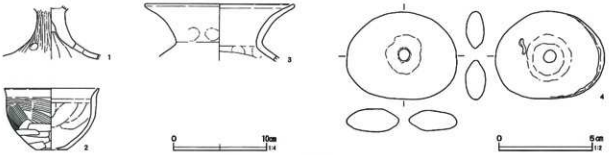
炉A

a　灰色土　シルト質砂粒子　焼土粒子・炭化物ブロック多

炉B

b　黒灰色土　粘土質シルト　焼土粒子少
　　炭化物ブロック多　灰色シルトブロック

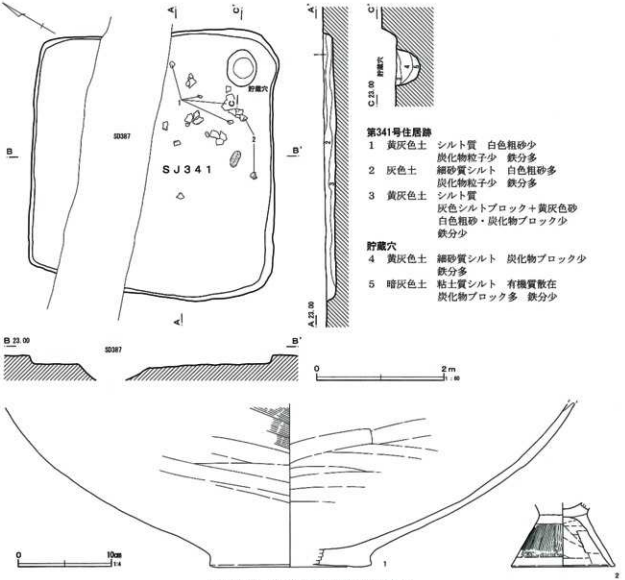
第220図　**第340号住居跡**



第221図　**第340号住居跡出土遺物**

第78表　**第340号住居跡出土遺物観察表**（第221図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏		(5.4)		ADE	A	浅黄橙	15	円孔3
2	小型鉢	(10.0)	6.5	(3.3)	ADE	A	にぶい黄橙	35	№4
3	壺	(15.6)	(6.0)		AB多E	B	浅黄橙	5	貯蔵穴



第341号住居跡

1　黄灰色土　シルト質　白色粗砂少
　　炭化物粒子少　鉄分多
2　灰色土　細砂質シルト　白色粗砂多
　　炭化物粒子少　鉄分多
3　黄灰色土　シルト質
　　灰色シルトブロック＋黄灰色砂
　　白色粗砂・炭化物ブロック少
　　鉄分少

貯蔵穴

4　黄灰色土　細砂質シルト　炭化物ブロック少
　　鉄分多
5　暗灰色土　粘土質シルト　有機質散在
　　炭化物ブロック多　鉄分少

第222図　**第341号住居跡・出土遺物**

第79表　**第341号住居跡出土遺物観察表**（第222図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	壺		(17.2)	(17.3)	CEI	B	浅黄橙	20	No1･4･8･9　風化･調整痕不明瞭
2	台付甕		(6.8)	10.5	ADE	A	にぶい黄橙	10	No9･12

第340号住居跡（第220図）

V29・W29グリッドに位置し、東半部は調査区外にある。

平面形態は、方形である。主軸長5.85m前後、幅5.40m前後、確認面からの深さ0.44mを測る。主軸方位は、N－43°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。掘形や覆土の堆積状況から、新旧の主柱穴の重複がみられる。このような状況から、建て替えられた住居跡と判断される。

炉は2基検出され、いずれも地床炉である。2基の炉の時間的な先後関係は明確ではない。住居の建て替えに伴って、炉も造り替えられた可能性もある。炉Aは、住居北西部に位置している。重複する第286号溝跡の攪乱を、辛うじて免れている。南北0.89m×東西0.78mの円形に焼土化し、多量の焼土粒子・炭化物ブロックが堆積していた。炉Bは、住居中央付近に位置している。南北0.26m×東西0.24mの楕円形に焼土化している。

壁溝は、北西壁に沿った、0.35～0.55mほど内側に巡っている。幅0.10～0.20m、床面からの深さ0.01～0.04mほどである。壁溝の検出された状況から、住居の建て替えと同時に、住居の拡張も行われた可能性がある。

貯蔵穴は、南東コーナー部付近に付設されている。発掘時に調査区周囲に巡らせた排水溝の中から検出されている。径0.32m、深さ0.28mほどの規模である。

住居南東部に位置しているP5は、数本のピットの重複もしくは掘り直しが確認される。東半部が調査区外にあり、詳細は不明である。炉との位置関係から、出入り口施設に伴う機能も想定される。

遺物は、住居北半部に分布している。図示したほかに、壺・甕類499.3g、高坏・器台類30.8gの図化できない微細な破片も出土している。

第221図4は環状石器で、弥生時代の遺構からの混入品と思われる。扁平な楕円礫が素材とされ、中央は穿孔されている。長径5.8cm、短径4.6cm、厚さ1.1～1.2cm、孔径0.6～0.7cm、重さ52.4gを測る。石材は、砂岩である。

第341号住居跡（第222図）

W25・W26グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。長軸長4.26m、短軸長3.92m、確認面からの深さ0.19mを測る。長軸の方位は、N－64°－Eを指す。覆土は自然堆積である。

主柱穴・炉・壁溝は、検出されていない。

貯蔵穴は、南東コーナー部に付設されている。規模は南北0.48m×東西0.58mの平面楕円形で、床面からの深さは0.38mほどである。底面は凹面を呈している。

遺物は、住居南東部に集中して分布している。図示したほかに、壺・甕類3013.3g、高坏・器台類150.6gの図化できない微細な破片も出土している。

第342号住居跡（第223図）

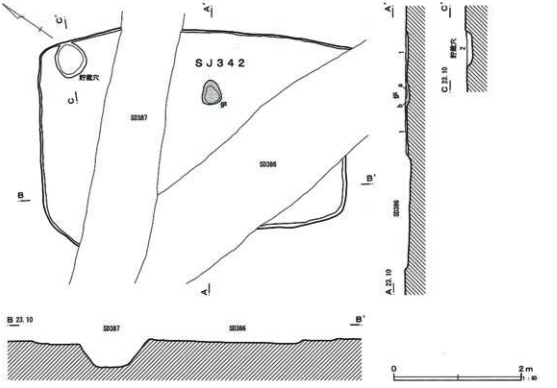
V26・W26グリッドに位置する。床面がほぼ露呈した状態で確認され、第386・387号溝跡による攪乱も著しい。

平面形態は、長軸を南北にもつ長方形である。主軸長3.16m、幅4.82mを測る。主軸方位は、N－53°－Eを指す。

主柱穴・壁溝は、検出されていない。

炉は、地床炉である。住居東部に位置している。南北0.31m×東西0.39mの不整円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

貯蔵穴は、北東コーナー部に付設されている。規模は南北0.48m×東西0.56mの楕円形で、床面か

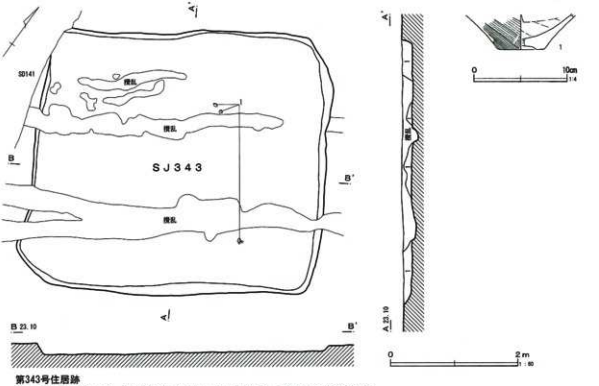


第342号住居跡
1　灰黄色土　貼床　灰色シルトブロック
　　地山灰黄色細砂　炭化物粒子少

貯蔵穴
2　灰色土　　シルト質　黒色土ブロック多量　炭化物少量

炉
a　橙褐色土　焼土層
b　暗褐色土　シルト質　炉跡埋形充填　鉄分・マンガン多

第223図　**第342号住居跡**



第343号住居跡
1　灰色土　シルト質　暗灰色シルトブロック＋灰色シルト細砂　炭化物粒子多

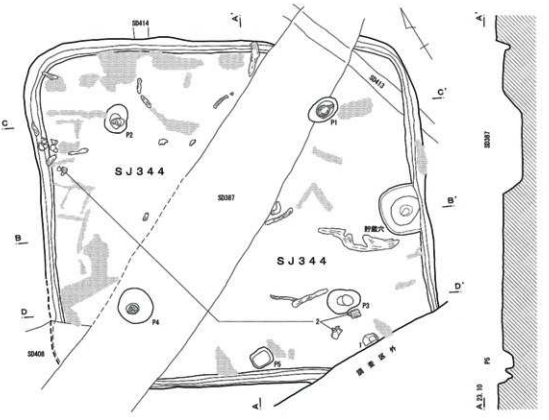
第224図　**第343号住居跡・出土遺物**

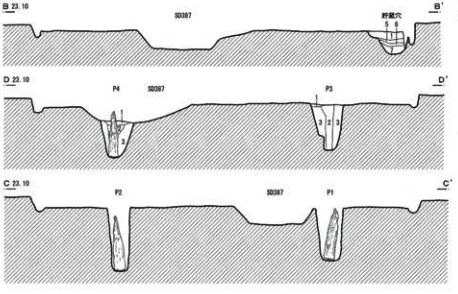
らの深さ0.11mほどである。

遺物は、壺・甕類52.8gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第80表　**第343号住居跡出土遺物観察表**（第224図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　考
1	小型鉢		(3.7)	(4.8)	ABE	A	黒(内面にぶい褐)	5	外面に煤付着





第344号住居跡

柱穴

1　灰褐色土
　炭化物・灰色粘土ブロック少
　しまり・粘性強

2　暗褐色土
　鉄分沈着　灰色粘土ブロック少
　しまり・粘性強

3　暗灰色土
　灰色粘土ブロック多

貯蔵穴

4　暗褐色土
　灰色粘土ブロック微量　炭化物少
　しまり・粘性強

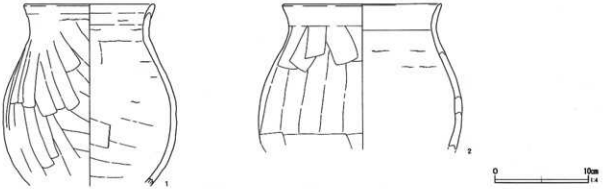
5　暗褐灰色土
　灰色粘土ブロック多　炭化物少
　しまり・粘性強

6　暗褐色土
　灰色粘土ブロック多　炭化物少
　しまり・粘性強

7　灰褐色土
　黒色土ブロック少

0　2m
1:80

第225図　**第344号住居跡**



第226図　**第344号住居跡出土遺物**

第81表　**第344号住居跡出土遺物観察表**（第226図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	甕	(13.6)	(19.2)		ABE	B	にぶい黄橙	35	№5
2	甕	16.6	(15.3)		BDE	A	にぶい橙	45	№1･2･3･4･5

第343号住居跡（第224図）

V28・V29・W28・W29グリッドに位置し、攪乱が著しい。

平面形態は、長軸を東西にもつ長方形である。長軸長4.64m、短軸長4.14m、確認面からの深さ0.18mを測る。長軸の方位は、N－34°－Wを指す。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は、図示したほかに、壺・甕類813.1gの図化できない微細な破片も出土している。

第344号住居跡（第225図）

X23・X24グリッドに位置し、南東コーナー部は調査区外にある。

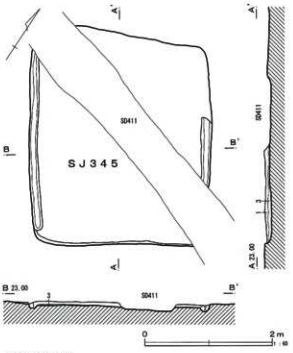
覆土下層から、多量の焼土や炭化物・炭化材が検出された焼失家屋である。平面形態は、方形である。南北長5.48m、東西長5.72m、確認面からの深さ0.12mを測る。南北軸の方位は、N－28°－Eを指す。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。住居と相似する長方形に配置されている。P1・P2・P4からは柱材残欠、P3では覆土の堆積状況に柱痕が確認できる。住居の焼失にあたり、土中に埋め込まれた柱根部分が焼失を免れ、残存したものと云える。

炉は、検出されていない。第387号溝跡に攪乱された部分に設置されていたことが予想される。

壁溝は、全周する。幅0.12～0.24m、床面からの深さ0.05～0.09mほどである。

貯蔵穴は、東壁中央の壁際に付設されている。上段は南北0.80m×東西0.65mの方形の掘り込みの



第345号住居跡
1　黒褐色土　地山ブロック少　粘性強
2　黄褐色土　地山ブロック多　粘性強
3　灰白色土　貼床層　地山ブロック多量

第227図　**第345号住居跡**

中央付近に、南北0.43m×東西0.46mの円形の掘り込みをもつ。床面からの深さは上段が0.11m、下段が0.34mほどである。

南壁中央付近の壁際には、P5が位置している。出入り口施設に伴う機能が想定される。

遺物は、主柱穴P3周辺および西壁際北半部に集中している。図示したほかに、壺・甕類638.2g、高坏・器台類21.7g、鉢・椀類39.6gの図化できない微細な破片も出土している。

第345号住居跡（第227図）

X25グリッドに位置する。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。長軸長3.30m、短軸長2.90m、確認面からの深さ0.05～0.07mを測る。長軸の方位は、N－34°－Wを指す。

主柱穴・炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、東壁の一部および西壁に巡っている。幅0.14～0.18m、床面からの深さ0.01～0.08mほどである。

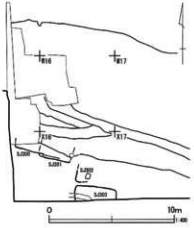
遺物は、出土していない。

(4) 第4群の住居跡

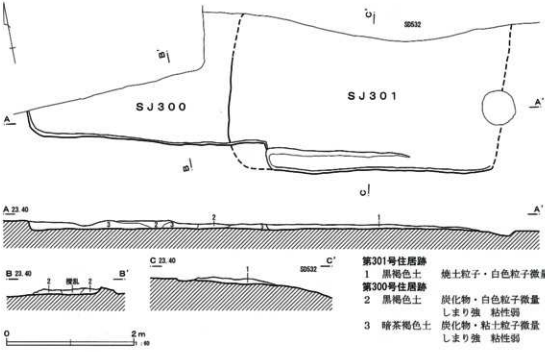
第4群は、調査区の南西端部の第423号溝跡以南に位置する4軒の住居群である（第300～303号住居跡）。調査区西側の第12地点南半部の住居跡群と繋がり、第4群はその北端部にあたる（第228図）。

第423号溝跡は、東西に流れる河川跡と推定されている。河川跡には、集落（ムラ）を画していた役割も推測されることから、第4群に分布する住居跡は、他群とは異なる集落＝隣ムラに所属する住居跡であった可能性が考えられる。

住居跡の軒数は4軒と少ない。また残存状態も悪く、全体像が検出された住居跡もない。そのため、平面形態や規模などに共通項の選出・分類を行うことはできない。ただし、南北軸の方向には、北側を東西に流れる河川跡の方向性が意識されている。



第228図　**第4群の住居跡分布図**



第229図　**第300・301号住居跡**

第300・301号住居跡（第229図）

X16・X17グリッドに位置する。重複する2軒の住居跡である。いずれも、北半部が第532号溝跡によって削平されている。2軒の住居跡の新旧関係は、第301号住居跡の方が新しい。

第301号住居跡は、一辺4.3m前後の平面方形の住居跡である。確認面からの深さは0.08mを測る。壁溝の一部が検出され、幅0.36m、深さ0.02mほどである。主柱穴・炉・貯蔵穴等の諸施設は発見されていない。

第300号住居跡は、一辺4m以上の平面方形の住居跡である。確認面からの深さは0.11mを測る。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は発見されていない。

２軒の住居跡とも、遺物は出土していない。

第302号住居跡（第230図）

Ｘ16グリッドに位置する。

平面形態が方形の住居跡で、南西コーナー付近のみが確認されている。規模は不明である。

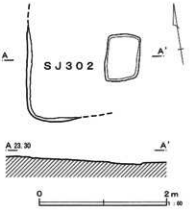
南北0.70ｍ×東西0.54ｍ、深さ0.01～0.02ｍの浅い土壙がみられるが、住居に付随する施設か断定できない。ほかに主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は発見されていない。

遺物は出土していない。

第303号住居跡（第231図）

Ｘ16グリッドに位置し、南半部が調査区外にある。

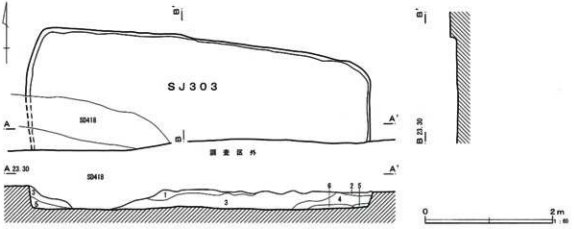
平面形態は、方形である。一辺5.50ｍ、確認面からの深さ0.17ｍを測る。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が看取できる。



第230図　**第302号住居跡**

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、発見されていない。

遺物は、壺・甕類８片・37.3gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

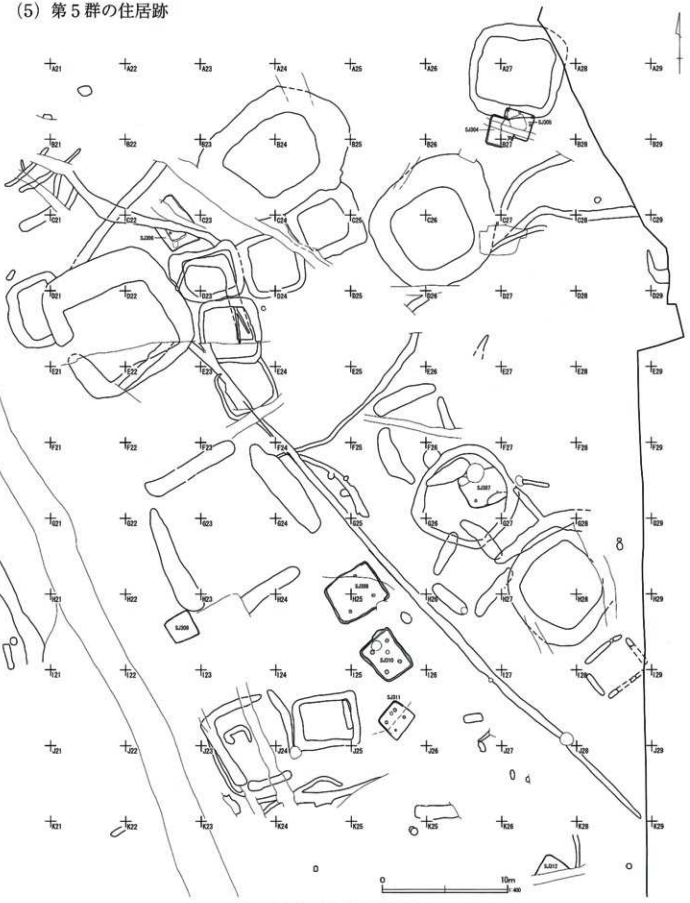


第303号住居跡

1	暗茶褐色土	鉄分・青灰色粘土粒子若干 しまり強　粘性やや強	4	暗灰色土	粘土層　焼土粒子・炭化物少 鉄分若干　しまり強
2	黒褐色土	鉄分多　焼土粒子少 しまり強　粘性やや強	5	青灰色土	粘土ブロック　焼土粒子少
3	灰褐色土	粘土層　焼土粒子・炭化物少 鉄分若干　しまり強	6	暗灰褐色土	粘土層　焼土粒子・炭化物少 鉄分若干　しまり強

第231図　**第303号住居跡**

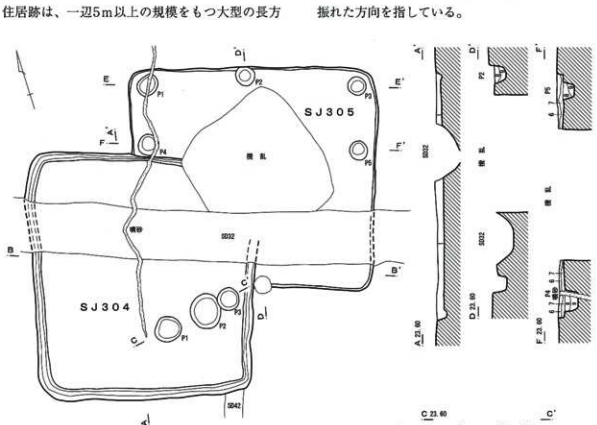
(5) 第５群の住居跡



第232図　**第５群の住居跡分布図**

第５群は、調査区中央を南北に貫く水路跡東側の北半部に所在する一群である（第232図）。住居跡の軒数は、８軒を数える（第304～311号住居跡）。周囲には方形周溝墓が分布し、これとの重複を避けるように住居跡が構築されている。

住居跡は、一辺5m以上の規模をもつ大型の長方形住居跡と、一辺3～4m前後の規模の小型の方形住居跡に分割される。長方形の住居跡には、南北・東西に長軸をもつものが共存している。南北軸の方向は、ほとんどが水路跡の方向を意識したものである。水路跡から離れた２軒は、座標北よりも東側に振れた方向を指している。



第304号住居跡柱穴

1　灰黄褐色土　炭化物少量
2　暗灰褐色土　炭化物少量
3　暗灰黄褐色土　炭化物少量
4　灰黄褐色土　炭化物少量　灰褐色シルトブロック多量
5　暗褐色土　炭化物少量

第305号住居跡

6　黒褐色土　炭化物少量
7　暗灰褐色土＋黒褐色土

柱穴

8　暗灰褐色土　炭化物少量
9　灰褐色土　炭化物少量

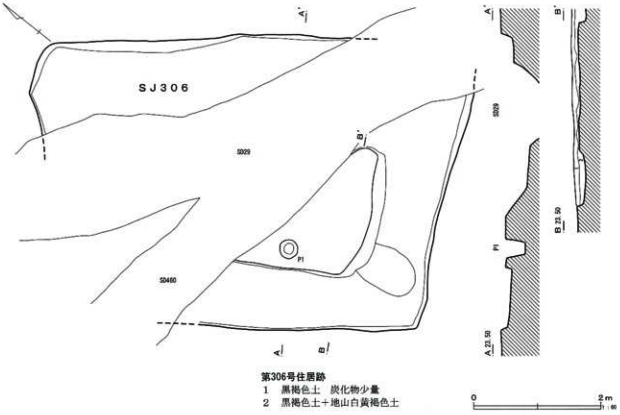
第233図　**第304・305号住居跡**

第304・305号住居跡（第233図）

A26・A27・B26・B27グリッドに位置する。

重複する２軒の住居跡である。後世の攪乱や第32号溝跡による掘削等から、２軒の住居跡の新旧関係は明確ではない。確認面の高さの違いから、第１号方形周溝墓よりは新しい。また、大地震に伴う液状化現象による噴砂の影響も受けている。

第304号住居跡は、平面形態が方形である。南北長3.84m、東西長3.51m、確認面からの深さ0.11mを測る。南北軸の方位は、N－24°－Eを指す。



第306号住居跡
1　黒褐色土　炭化物少量
2　黒褐色土＋地山白黄褐色土

第234図　**第306号住居跡**

主柱穴・炉・貯蔵穴は、検出されていない。壁溝は、全周する。幅0.14～0.18m、床面からの深さ0.01～0.08mほどである。ピットは、住居南東部にP1・P2・P3の3本が列んでいる。遺物は、出土していない。

第305号住居跡は、平面形態が方形である。南北長3.45m、東西長3.83m、確認面からの深さ0.10mを測る。南北軸の方位は、N－16°－Eを指す。炉・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。住居北半部の壁際に沿って、5本のピットが配置されている。南半部は第304号住居跡・第32号溝跡と重複するためピットの存在は不明であるが、壁際に設置された柱穴の可能性がある。

遺物は、出土していない。

第306号住居跡（第234図）

B22・C22グリッドに位置する。重複する第29・460号溝跡による攪乱が著しい。

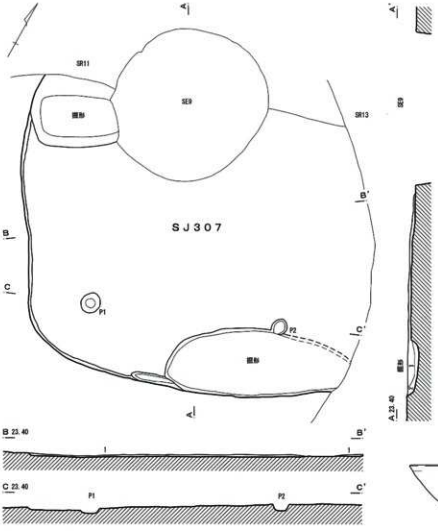
平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。長軸長6.93m、短軸長4.64m、確認面からの深さ0.11mを測る。長軸の方位は、N－36°－Wを指す。住居中央部が高く、壁に沿って幅の広い溝状の掘形が巡っている。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。ピットは、住居南西部のP1のみである。

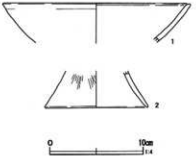
遺物は、出土していない。

第82表　**第307号住居跡出土遺物観察表**（第235図）

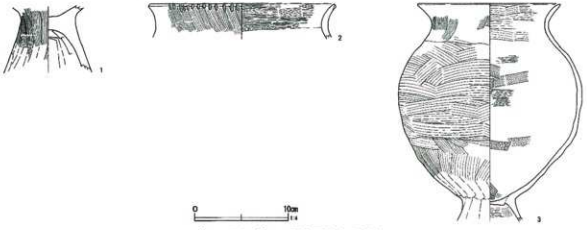
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(19.8)	(4.1)		ABE	B	にぶい黄橙	5	風化・調整痕不明瞭
2	台付甕		(4.9)	(10.8)	AE	B	橙	5	風化・調整痕不明瞭



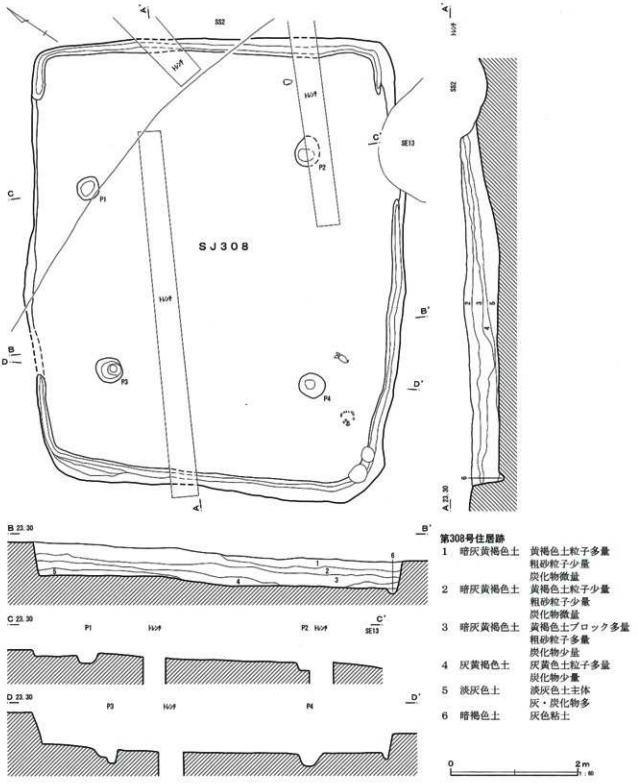
第307号住居跡
1　暗褐色土　炭化物・焼土粒子少　しまり強　粘性弱
2　暗褐色土　撹形壇め炭し　白色粘土ブロック・炭化物少　しまり強



第235図　**第307号住居跡・出土遺物**



第236図　**第308号住居跡出土遺物**



第237図 **第308号住居跡**

第83表 **第308号住居跡出土遺物観察表**（第236図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	台付甕		(6.9)		ABE	A	にぶい黄橙	5	
2	甕	(19.6)	(3.7)		ABE	A	にぶい橙	5	
3	台付甕	(15.0)	(23.0)		ABE	B	橙	65	胴部外面に煤付着

第307号住居跡（第235図）

F26・F27グリッドに位置し、床面がほぼ露呈した状態で確認されている。また確認面の高さの違いから、重複する第11・13号方形周溝墓よりも古く、北壁・東壁部を攪乱されている。

平面形態は、方形である。南北4.6m・東西5.6m以上の平面規模をもつ。南北軸の方位は、N－23°－Wを指す。住居北西部・南東部に土壙状の掘形が確認されている。

主柱穴は、南列のP1・P2のみである。これに対応する北列の主柱穴は、発見されていない。

炉・壁溝・貯蔵穴は、検出されていない。

遺物は、図示したほかに、壺・甕類322.0gの図化できない微細な破片も出土している。

第308号住居跡（第237図）

G24・G25・H24・H25グリッドに位置する。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。長軸長7.07m、短軸長5.97m、確認面からの深さ0.23～0.44mを測る。長軸の方位は、N－57°－Eを指す。床面は中央付近に向かって傾斜する凹面を呈している。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。住居の平面形態とは異なる台形に配置されている。

炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、南壁南東コーナー付近および北壁を除き全周する。幅0.15～0.33m、床面からの深さ0.02～0.09mほどである。

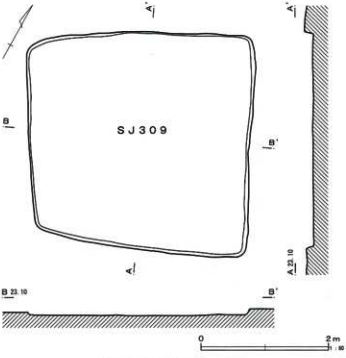
遺物は、南西コーナー付近にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類934.1gの図化できない微細な破片も出土している。

第309号住居跡（第238図）

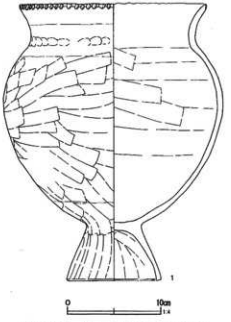
H22グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。南北長3.45m、東西長3.47m、確認面からの深さ0.04～0.14mを測る。南北軸の方位は、N－59°－Wを指す。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出さ



第238図　**第309号住居跡**



第239図　**第310号住居跡出土遺物**

第84表　**第310号住居跡出土遺物観察表**（第239図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	台付甕	19.7	29.1	10.0	AE	A	にぶい橙	65	No1・2　外面に煤付着

れていない。

遺物は、出土していない。

第310号住居跡（第240図）

H25・I25グリッドに位置する。

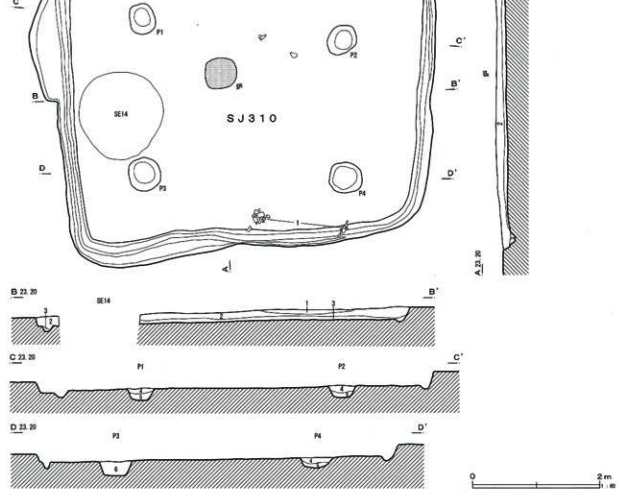
平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。主軸長4.60m、幅5.94m、確認面からの深さ0.16mを測る。主軸方位は、N－52°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。

炉は、地床炉である。住居中央付近北西に位置している。南北0.56m×東西0.50mの方形に焼土化している。

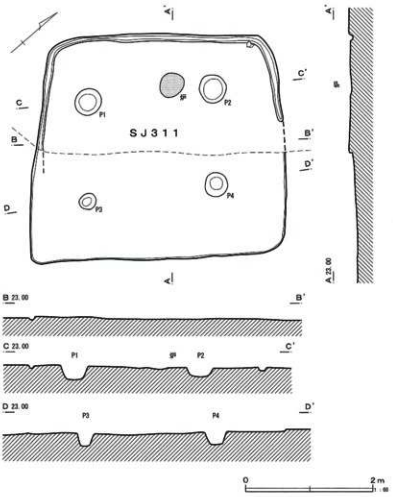
壁溝は、全周する。幅0.10～0.25m、床面からの深さ0.06～0.11mほどである。

貯蔵穴は、付設されていない。



第310号住居跡
1　淡灰黄色土　黄褐色砂粒子主体　炭化物少量
2　暗灰褐色土　灰黄色土多　炭化物少量
3　暗灰褐色土　灰黄色土少量　炭化物多量
柱穴
4　黒褐色土　炭化物ブロック多　白色粘土粒子少　粘性・しまり強
5　暗褐色土　炭化物微量
6　青灰色土

第240図　**第310号住居跡**



第241図　**第311号住居跡**

遺物は、西壁南半部付近にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類3119.3gの図化できない微細な破片も出土している。

第311号住居跡（第241図）

Ⅰ25グリッドに位置する。北半部は床面が露呈した状態で、南半部は壁の一部・柱穴のみが確認されている。

平面形態は、方形である。主軸長3.55m、幅3.93mを測る。主軸方位は、N－50°－Wを指す。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。長方形に配置されている。

炉は、地床炉である。主柱穴P2に隣接する住居北部に位置している。南北0.39m×東西0.38mの円形に焼土化している。

壁溝は、住居北半部に巡っている。幅0.08～0.13m、床面からの深さ0.03～0.05mほどである。

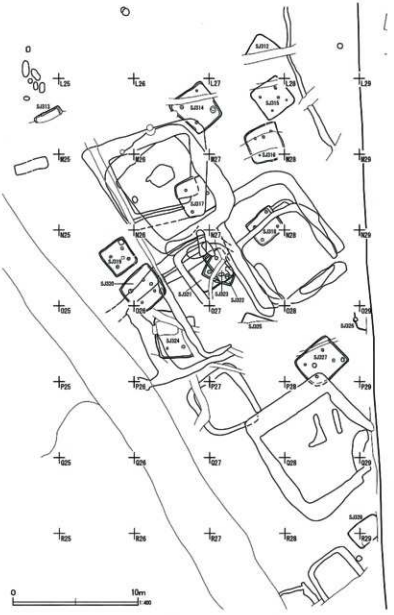
貯蔵穴は、付設されていない。

遺物は、壺・甕類1383.5gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

(6) 第6群の住居跡

第6群は、調査区中央を南北に貫く水路跡東側の南半部に所在する一群である（第242図）。住居跡の軒数は、17軒を数える（第312～328号住居跡）。周囲には、方形周溝墓が分布し、これとの重複を避けるように住居跡が構築されている。

住居跡は、一辺5m前後の規模の方形住居跡が主体となっている。一部に長方形住居跡もみられるが、規模はほぼ同等である。南北軸の方向は、ほとんどが水路跡の方向を意識したものである。例外的なものは、住居跡・方形周溝墓との重複がみられる。



第242図　**第6群の住居跡分布図**

第312号住居跡（第243図）

K27グリッドに位置する。第166号溝跡による掘削を免れた、北半部のみが確認されている。

平面形態は、方形である。南北軸の方位は、N－30°－Eを指す。平面規模は3.7m以上を有し、確認面からの深さ0.10mを測る。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は、壺・甕類507.4gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

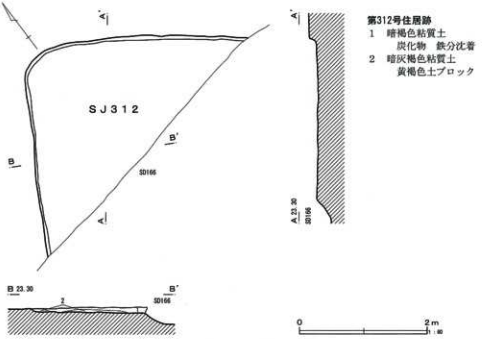
第313号住居跡（第244図）

L24・L25グリッドに位置する。第166号溝跡による掘削を免れた、北部のみが確認されている。

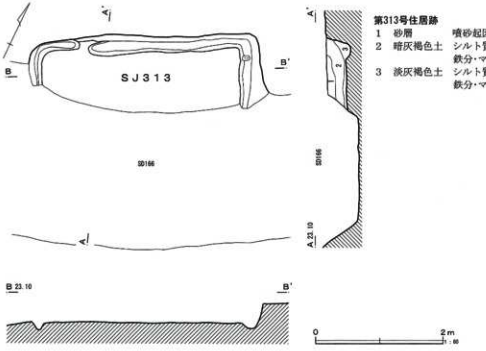
平面形態は、方形である。東西長3.68m、確認面からの深さ0.30～0.33mを測る。南北軸の方位は、N－29°－Wを測る。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。

主柱穴・炉・貯蔵穴は、検出されていない。

壁溝は、北壁北西コーナー付近以外を巡っている。幅0.14～0.32m、床面からの深さ0.04～0.09mほ



第243図　**第312号住居跡**



第244図　**第313号住居跡**

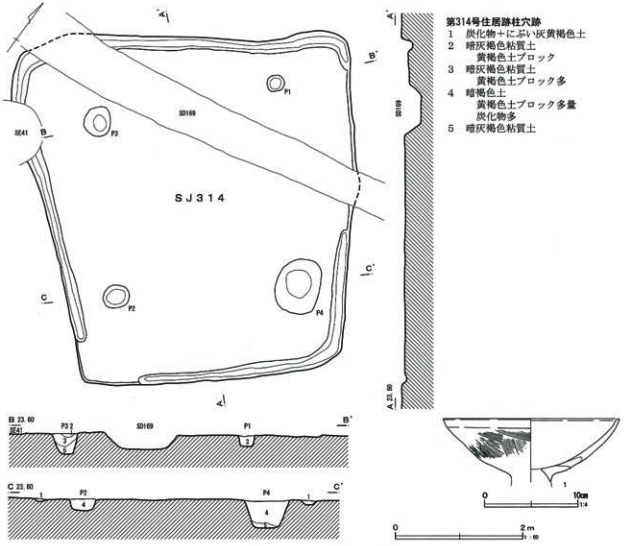
どである。

遺物は、出土していない。

第314号住居跡（第245図）

L26・L27グリッドに位置する。古代の第169号溝跡・第41号井戸跡によって攪乱されている。また第19号方形周溝墓と重複するが、確認面の高さの違いから、第314号住居跡の方が新しい。

平面形態は、台形である。南北長5.47m、東西長4.04～5.16mを測る。床面が、ほぼ露呈した状態で確認されている。南北軸の方位は、N－40°



第245図 **第314号住居跡・出土遺物**

第85表 **第314号住居跡出土遺物観察表**（第245図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	18.7	(6.7)		A多B	B	浅黄橙	40	風化･調整痕不明瞭

－Wを指す。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。住居の平面形態とは異なる配置を示す。

炉は、検出されていない。第169号溝跡によって想定される箇所が掘削されている。

壁溝は、東壁北半部および南西コーナー部を除き、巡っている。幅0.19～0.25m、床面からの深さ0.02～0.06mほどである。微量の炭化物と、鉄分を多く含んだ暗灰褐色土が堆積していた。

貯蔵穴は、付設されていない。

遺物は、図示したほかに、壺・甕類22.2gの図化できない微細な破片も出土している。

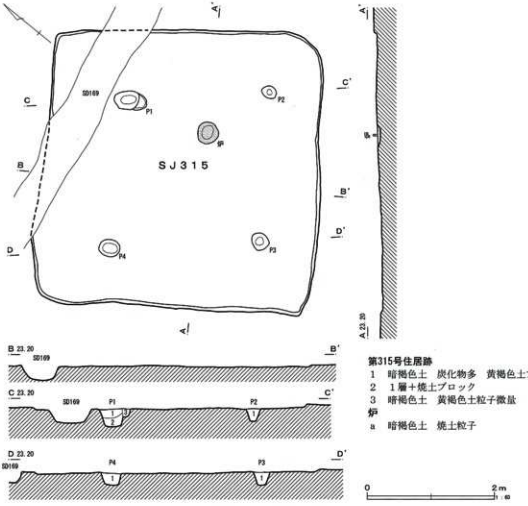
第315号住居跡（第246図）

K27・L27・L28グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。主軸長4.42m、幅4.42m、確認面からの深さ0.02～0.04mを測る。主軸方位は、N－53°－Eを指す。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。全体的に南壁によって位置している。

炉は、地床炉である。住居中央付近東部に位置し



第246図　**第315号住居跡**

ている。南北0.33m×東西0.33mの円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

壁溝・貯蔵穴は、付設されていない。

遺物は、壺・甕類111.8g、高坏・器台類5.5gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第316号住居跡（第247図）

L27・M27グリッドに位置する。

平面形態は、台形である。主軸長4.45～5.33m、幅4.61mを測る。主軸方位は、N－17°－Wを指す。

床面は北側から南側へ傾斜し、確認面からの深さは0.05～0.40mと幅がある。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。また、南壁付近では、床面の直上に灰・炭化物が堆積している。

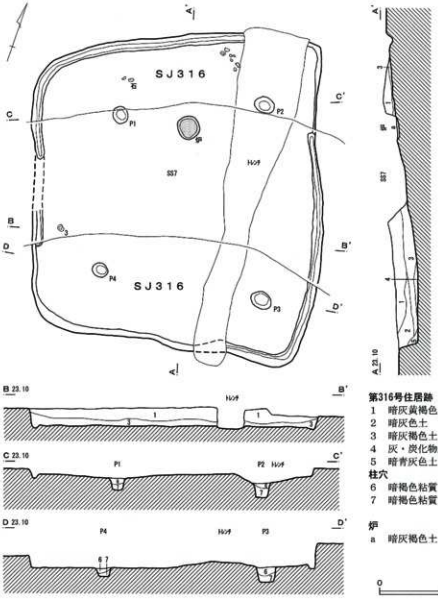
主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。全体的に東壁によって位置する。住居の平面形態と同様に、台形に配置されている。

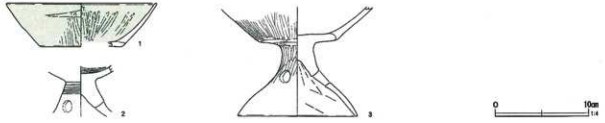
炉は、地床炉である。住居北央部に位置している。南北0.36m×東西0.36mの円形に焼土化し、浅い掘形には炭化物・焼土粒子を含む暗灰褐色土が堆積している。

壁溝は、東壁北半～南壁東部および西壁中央～北壁に沿って巡っている。幅0.09～0.20m、床面からの深さ0.02～0.06mほどである。

貯蔵穴は、付設されていない。

遺物は、北壁・西壁沿いにまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類918.8g、高坏・器台類78.9gの図化できない微細な破片も出土している。

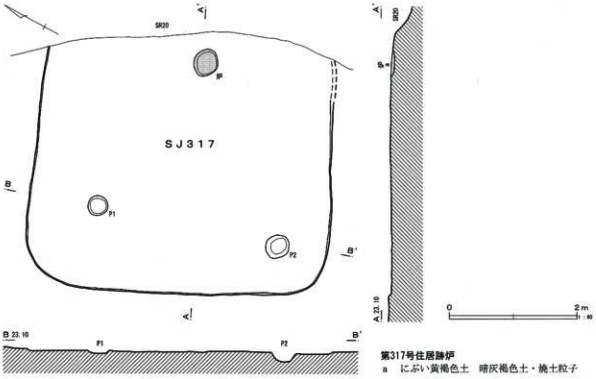




第247図 **第316号住居跡・出土遺物**

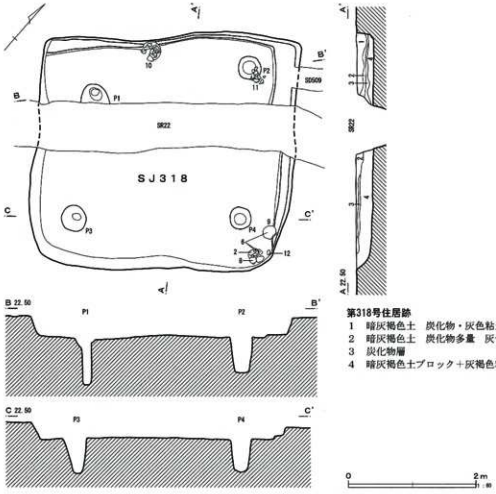
第86表 **第316号住居跡出土遺物観察表**（第247図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏	(15.8)	(4.6)		ABE	A	にぶい黄橙	10	内外面赤彩
2	高坏		(5.3)		AI	A	橙	15	円孔3
3	高坏		(11.6)	(12.6)	AB多I	A	浅黄橙	50	№4 円孔3



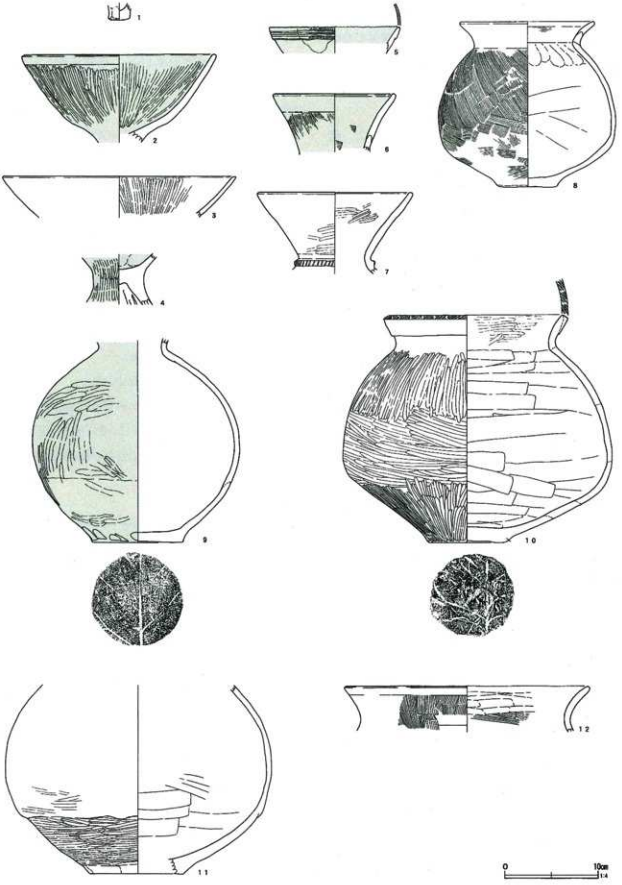
第317号住居跡炉
a　にぶい黄褐色土　暗灰褐色土・焼土粒子

第248図　**第317号住居跡**



第318号住居跡
1　暗灰褐色土　炭化物・灰色粘土ブロック微量
2　暗灰褐色土　炭化物多量　灰色粘土ブロック多
3　炭化物層
4　暗灰褐色土ブロック＋灰褐色粘土ブロック

第249図　**第318号住居跡**



第250図　**第318号住居跡出土遺物**

第317号住居跡（第248図）

M26グリッドに位置し、ほぼ床面が露呈した状態で確認されている。重複する遺構との新旧関係は、確認面の高さの違いから、第19・20号方形周溝墓、第641号土壙よりも先行する。

平面形態は、方形である。主軸長4.2m以上、幅4.75mを測る。主軸方位は、N－63°－Eを指す。

主柱穴は、P1・P2の2本が検出され、西壁によって配置されている。これに対応する主柱穴は、第20号方形周溝墓によって掘削される。

炉は、地床炉である。住居東部に位置している。南北0.37m×東西0.43mの円形に焼土化し、浅い掘形をもつ。

壁溝・貯蔵穴は、付設されていない。

遺物は、壺・甕類576.5g、高坏・器台類56.2gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

第318号住居跡（第249図）

M26・M27グリッドに位置する。確認面の高さの違いから、重複する第22号方形周溝墓・第509号溝跡よりも先行する。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。南北長3.68m、東西長4.15m、確認面からの深さ0.31mを測る。南北軸の方位は、N－36°－Wを指す。

北壁・東壁に沿って、床面との比高差0.05m、幅0.15～0.40mほどのテラス状の高まりが巡っている。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。いずれの主柱穴も平面規模に対して、深い掘形をもつ。コーナーに近接するP2を貯蔵穴と捉えることも可能であるが、掘形の規模から主柱穴と判断される。

炉は、設置が想定される位置に、第22号方形周溝墓による攪乱を受けている。

壁溝・貯蔵穴は、付設されていない。

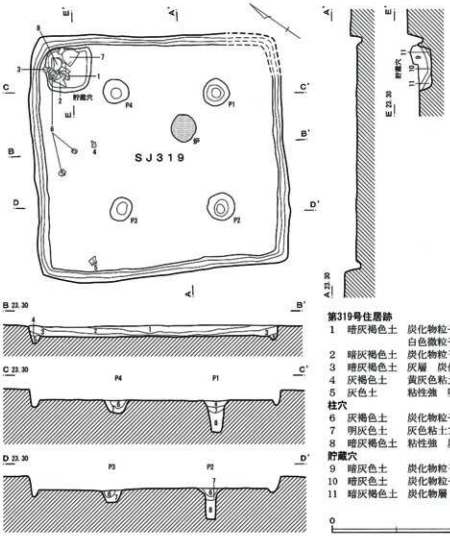
遺物は、北壁・南東コーナー付近にまとまった分布がみられる。図示したほかに、壺・甕類1550.7g、高坏・器台類33.0gの図化できない微細な破片も出土している。

第87表　**第318号住居跡出土遺物観察表**（第250図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	ミニチュア		(1.7)	2.3	BD	B	にぶい黄橙	80	
2	高坏	20.0	(9.3)		BDE	A	にぶい橙	60	No4　内外面赤彩
3	高坏	(24.7)	(4.3)		E	B	橙	15	
4	高坏		(5.3)		BE	A	灰白	15	外面・坏部内面に赤彩
5	壺				AE	A	灰白	5	縄文施文（単節LR）内外面赤彩
6	壺	12.6	(6.1)		CE多I	A	にぶい黄橙	10	No3・4　内外面赤彩痕
7	壺	16.0	(8.6)		DE	A	にぶい橙	15	頸部突帯に刺突文
8	壺	(14.0)	17.5	5.8	ABCE	A	橙	90	No4
9	壺		(21.3)	9.8	BCEGI	B	灰黄（赤彩下）	90	No3　外面赤彩　底部木葉痕
10	壺	(18.5)	23.9	8.0	AE	A	浅黄橙	80	No1　縄文施文（単節LR）外面赤彩痕　底部木葉痕
11	壺		(19.8)	(9.8)	AE	A	にぶい橙	30	No2
12	甕	(25.6)	(4.6)		ABG多	A	にぶい黄橙	5	No5

第88表　**第319号住居跡出土遺物観察表**（第251図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	16.8	11.0	(9.4)	ABCGI	B	橙	80	No6　風化顕著
2	高坏	19.0	12.7	10.8	ABDE	B	橙	95	No5　円孔4
3	器台	(6.6)	7.2	8.0	ABCEG	B	にぶい橙	80	No3　円孔3　鉄分付着
4	小型甕	(11.8)	(6.6)		ACEG	B	橙	5	No7
5	台付甕		(5.8)	7.9	AE	C	淡黄橙	10	No10　二次的な被熱等による風化顕著
6	壺	(15.4)	(4.3)		AEG	B	橙	5	
7	台付甕		(9.4)	8.7	AE	B	橙	20	No1　風化・調整痕不明瞭
8	台付甕	14.6	(16.9)		AE	B	橙	85	No2



第319号住居跡

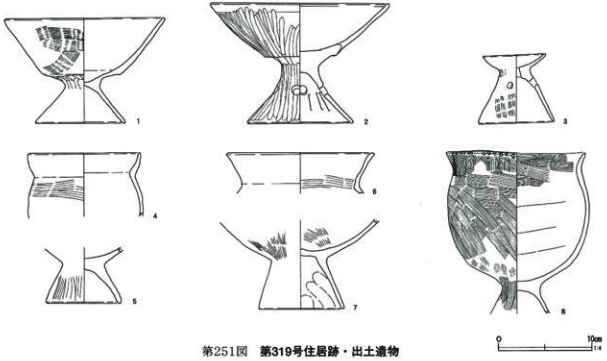
1　暗灰褐色土　炭化物粒子少
　　白色微粒子微量　明灰色粘土粒子多
2　暗灰褐色土　炭化物粒子少　明灰色粘土ブロック
3　暗灰褐色土　灰層　炭化物粒子多
4　灰褐色土　黄灰色粘土粒子多
5　灰色土　粘性強　明灰色粘土粒子少

柱穴

6　灰褐色土　炭化物粒子少　明灰色粘土ブロック
7　明灰色土　灰色粘土ブロック
8　暗灰褐色土　粘性強　炭化物粒子微量

貯蔵穴

9　暗灰色土　炭化物粒子少　明灰色粘土ブロック
10　暗灰色土　炭化物粒子少　明灰色粘土粒子多
11　暗灰褐色土　炭化物層　明灰色粘土粒子少

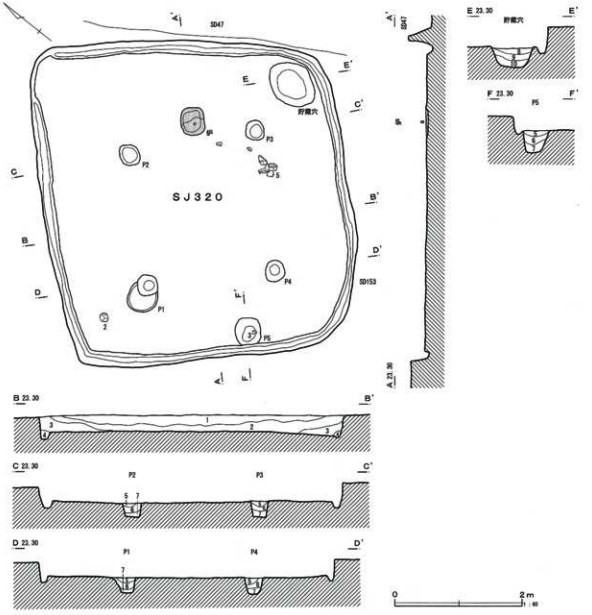


第251図　**第319号住居跡・出土遺物**

第250図５は、複合口縁壺の口縁部の小破片である。外面には単節ＬＲの縄文が施文された後、凹線文が施されている。また、口唇部にも単節ＬＲの縄文が施文されている。さらに、内外面ともに、赤彩がみられる。

第250図７は、単口縁壺の頸部突帯に、刺突文が施されている。

第250図10は、口唇部に単節ＬＲ縄文が施文され、外面には赤彩が施されている。また、底部には、木葉痕がみられる。



第320号住居跡

1　暗灰褐色土　白色微粒子微量　炭化物粒子少
　　明灰褐色土粒子
2　暗灰褐色土　炭化物粒子多
　　(間層に灰層堆積)
3　黄灰色土　炭化物粒子微量　黄灰色土粒子多
4　灰色土　粘性強　明灰色粘土ブロック

柱穴

5　暗灰色土　炭化物粒子多　明灰色粘土多　しまり欠
6　明灰色土　炭化物粒子微量　灰色粘土粒子少
7　暗灰褐色土　炭化物粒子微量　明灰色粘土粒子多

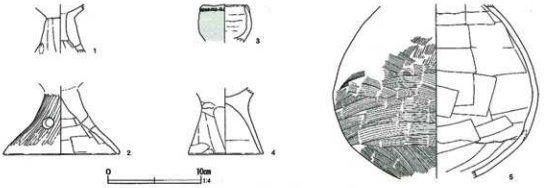
貯蔵穴

8　暗灰褐色土　炭化物粒子多　灰色粘土　しまり欠
9　暗灰褐色土　炭化物粒子少　明灰色粘土ブロック
10　暗灰褐色土　炭化物粒子少　暗灰色粘土

炉

a　黒色土　炭化物・灰層　(火床面焼土化)

第252図　**第320号住居跡**



第253図　**第320号住居跡出土遺物**

第89表　**第320号住居跡出土遺物観察表**（第253図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	器台		(5.2)		ABDE	B	にぶい黄橙	15	No5　円孔1のみ確認
2	高坏		(7.2)	12.2	B多G	B	にぶい黄橙	40	No7　円孔3
3	小型鉢	4.5	(4.0)		ABD	B	にぶい黄橙	70	No6　刺突列点文　外面赤彩
4	台付甕		(7.0)	(7.8)	AEI	B	にぶい橙	5	
5	壺		(18.3)		B多D多I	B	橙	25	No1

第319号住居跡（第251図）

N25・N26グリッドに位置する。

平面形態は、方形である。主軸長3.72m、幅4.00m、確認面からの深さ0.10～0.22mを測る。主軸方位は、N－53°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。また、壁溝部埋没後の床面直上には、炭化物粒子を多量に含む灰層が堆積している。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。方形に配置されている。平面規模に大差はないが、深さは北列P3・P4が浅く、南列P1・P2が深い。

炉は、地床炉である。住居中央付近南東部に位置している。南北0.40m×東西0.44mの円形に焼土化している。

壁溝は、全周する。幅0.12～0.20m、床面からの深さ0.05～0.11mほどである。

貯蔵穴は、北東コーナーに付設されている。南北0.72m×東西0.70mの方形で、床面からの深さ0.23mを測る。最下層には炭化物が堆積している。

遺物は、貯蔵穴からまとまって出土している。図示したほかに、壺・甕類1243.5g、高坏・器台類128.2gの微細な破片もある。

第320号住居跡（第252図）

N25・N26・O25・O26グリッドに位置する。確認面の高さの違いから、重複する第511号溝跡よりも先行し、第24号方形周溝墓よりも新しい。

平面形態は、方形である。主軸長5.04m、幅4.86m、確認面からの深さ0.30～0.39mを測る。主軸方位は、N－48°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。また、2・3層間には、薄い灰層がみられる。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。掘形の規模に統一感がある。主軸と軸方向を若干違えて、全体的に西側によって配置されている。

炉は、地床炉である。主柱穴P2・P3を結ぶ北東列よりも北西壁側に位置している。南北0.38m×東西0.44mの方形に焼土化し、火床面直上には炭化物・灰が堆積している。

壁溝は、全周する。幅0.12～0.23m、床面からの深さ0.05～0.11mほどである。

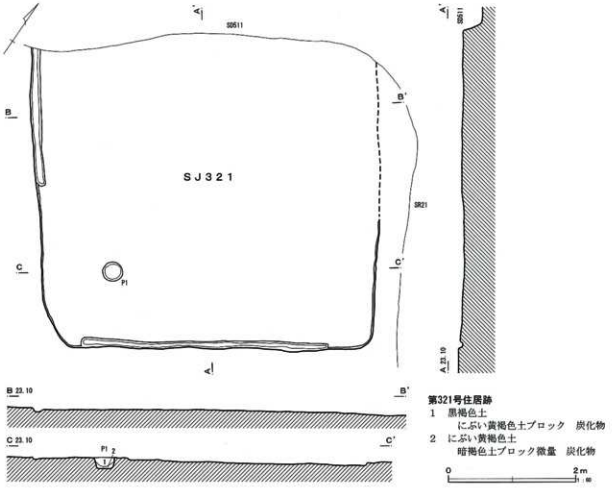
貯蔵穴は、東コーナー部に付設されている。南北0.85m×東西0.66mの楕円形で、床面からの深さ0.34mを測る。

炉に相対する南西壁南側の壁際には、P5が位置

する。他の諸施設の位置関係から、出入り口施設に伴う機能が推定される。

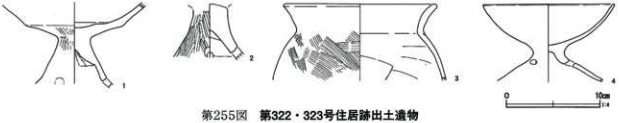
遺物は、散漫な分布を示す。図示したほかに、壺・甕類3970.4g、高坏・器台類125.2gの図化できない微細な破片も出土している。

第253図３は、口縁部外面に棒状工具の刺突による列点文が施文され、赤彩が施されている。



第254図 **第321号住居跡**

第322号住居跡

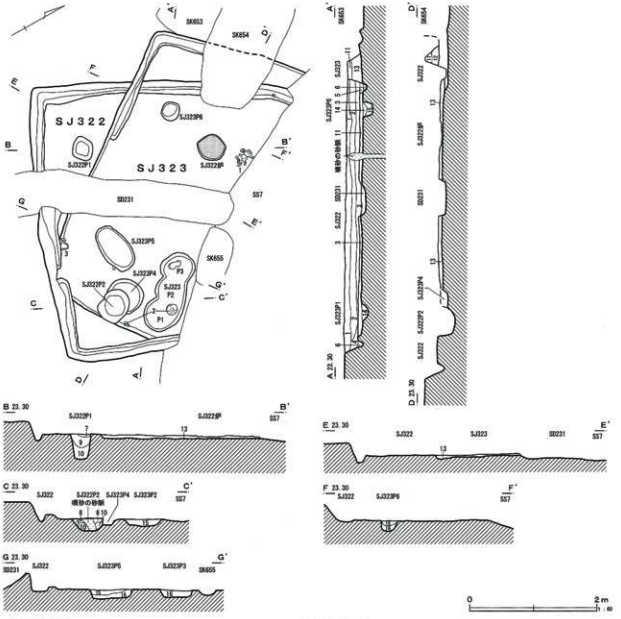


第323号住居跡

第255図 **第322・323号住居跡出土遺物**

第90表 **第322・323号住居跡出土遺物観察表**（第255図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	高坏		(8.6)		AB多I	B	橙	40	SJ322 No3 円孔(3) 風化・調整痕不明瞭
2	高坏		(5.5)		AB多DE	A	にぶい黄橙	20	SJ322 No1 円孔4
3	甕	(15.6)	(8.0)		ABE	B	にぶい橙	5	SJ322 No2 内面に鉄分付着・調整痕不明瞭
4	高坏	14.0	(8.2)		AE	B	にぶい黄橙	80	SJ323 No1 円孔3 風化・調整痕不明瞭



第322号住居跡

1　暗灰色土　シルト質　灰色砂粒
　　炭化物少量　Fe・Mg沈着
2　暗灰黄色土　シルト質　炭化物少量
　　灰黄色土　Fe・Mg沈着
3　暗灰黄色土　貼床　シルト質　灰黄色土ブロック
　　炭化物少　Fe・Mg沈着
4　淡灰黄色土　シルト質　炭化物少量　Fe・Mg沈着
5　灰褐色土　灰黄褐色土ブロック多
6　暗灰褐色土　灰黄褐色土ブロック微量

柱穴

7　灰褐色粘質土　黄褐色粘土粒子微量
8　暗褐色土　炭化物・焼土微量
9　暗灰褐色土　粘質土　灰褐色土粒子　炭化物微量
10　暗褐色土　粘質土　灰褐色土粒子・炭化物

第323号住居跡

11　暗灰褐色土　シルト質　炭化物微量　Fe・Mg沈着
12　暗灰色土　シルト質　灰色シルトブロック
　　炭化物微量　Fe・Mg沈着
13　暗灰黄色土　入為的埋戻層　SJ322貼床

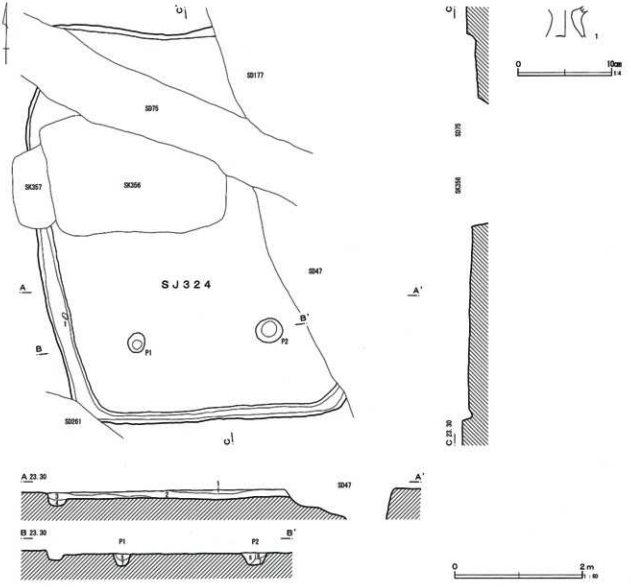
柱穴

14　暗灰褐色土　シルト質　炭化物少量　Fe・Mg沈着
15　暗灰黄褐色土　シルト質　炭化物少量
　　黄色土粒子少量　Fe・Mg沈着
16　暗灰褐色土　シルト質　炭化物少量
　　黄褐色土粒子少量　Fe・Mg沈着
17　灰褐色粘土質　炭化物微量

第256図　**第322・323号住居跡**

第321・322・323号住居跡（第254・256図）

N26・N27グリッドに位置する。重複する3軒の住居跡で、第321号住居跡→第323号住居跡→第322号住居跡の順に構築されている。そのほかの遺構との新旧関係は、覆土の堆積状況や確認面の高さの違いから、第24号方形周溝墓・第653・654・655号土壙→第321・323・322号住居跡→第23号方形周溝墓・第513号溝跡→第7号古墳跡の順に新しくなる。また、大地震に伴う液状化現象による噴砂の影響も受けている。



第324号住居跡

1　暗灰褐色土　明褐色土粒子・白色粒子少　炭化物粒子微量
2　暗灰褐色土　明褐色土粒子・炭化物多
3　灰褐色土　明灰褐色土ブロック少　炭化物粒子微量
4　暗灰褐色土　炭化物粒子少　粘性強

柱穴

5　暗褐色土　白色粒子少　炭化物粒子微量
6　灰褐色土　暗褐色土ブロック少　しまり良
7　黄灰色土　灰色粘土粒子多　しまり良

第257図　**第324号住居跡・出土遺物**

第91表　**第324号住居跡出土遺物観察表**（第257図）

番号	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	器台		(2.8)		AEGI	B	にぶい橙	5	円孔(3)

第321号住居跡は、床面が露呈した状態で確認されている。平面形態が方形で、南北長5.0m以上、東西長5.32mを測る。南北軸の方位は、N－35°－Wを指す。主柱穴・炉・貯蔵穴は、検出されていない。壁溝は、南壁および西壁北半に巡っている。幅0.08～0.16m、床面からの深さ0.08～0.16mほどである。遺物は、壺・甕類12.9gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

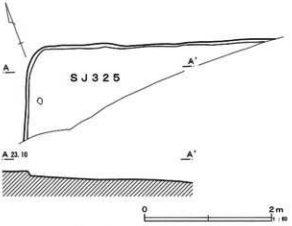
第322号住居跡は、平面形態が方形である。主軸長4.38m、幅4.25m以上、確認面からの深さ0.17～0.20mを測る。主軸方位は、N－65°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。炉は、地床炉である。住居北西部に位置している。南北0.46m×東西0.40mの円形に焼土化している。壁溝は南壁中央付近で途切れるほかは、全周する。幅0.16～0.28m、床面からの深さ0.07～0.10mほどである。貯蔵穴は、付設されていない。P1・P2のピットが2本検出されているが、主柱穴となるのか不明である。遺物は、炉周辺に分布している。図示したほかに、壺・甕類228.4g、高坏・器台類153.7gの図化できない微細な破片も出土している。

第323号住居跡は、平面形態が方形である。南北長4.56m、確認面からの深さ0.22mを測る。南北軸の方位は、N－35°－Wを指す。覆土の自然堆積は、床面付近は人為的に埋め戻されている。ピットは6本検出されているが、主柱穴は不明である。炉・貯蔵穴は、みつかっていない。壁溝は、西壁北半から北壁北東コーナー付近に巡っている。幅0.14～0.20m、床面からの深さ0.03～0.05mほどである。

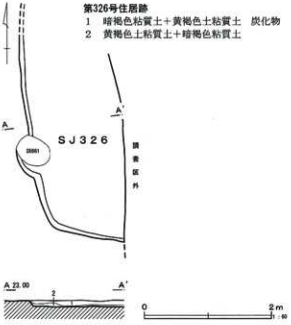
第324号住居跡（第257図）

O26グリッドに位置し、古代の遺構による攪乱が著しい。また確認面の高さの違いから、重複する第24号方形周溝墓・第516・517号溝跡よりも新しい。

平面形態は、南北に長軸をもつ長方形である。南北長6.12m、東西長4.50m以上、確認面からの深さ0.07～0.10mを測る。南北軸の方位は、N－6°－Wを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。



第258図　**第325号住居跡**



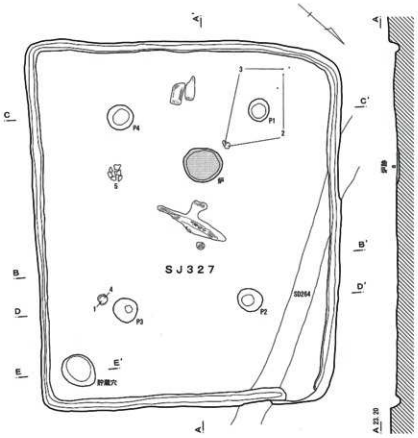
第259図　**第326号住居跡**

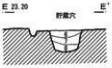
主柱穴は、P1・P2の2本が検出されている。これに対応する主柱穴は、古代の遺構によって掘削されている。

炉・貯蔵穴は、みつかっていない。炉も古代の遺構によって掘削されている。

壁溝は、南壁～西壁南半部に巡っている。幅0.18～0.34m、床面からの深さ0.02～0.11mほどである。

遺物は、散漫な分布を示す。図示したほかに、壺・甕類58.8gの図化できない微細な破片も出土している。





第327号住居跡

1　暗灰色土　灰・炭化物粒子少
　　焼土粒子・明灰褐色土粒子少
2　暗灰褐色土　炭化物粒子微量
　　褐色土粒子少　しまり良　粘性強
3　暗灰色土　炭化物粒子多
　　灰・炭化材　しまり弱

柱穴

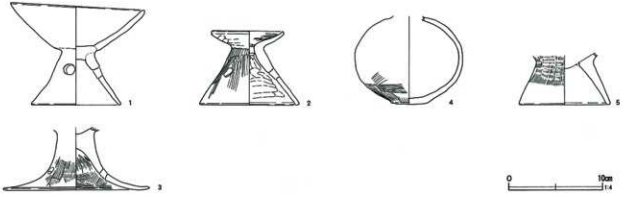
4　暗灰褐色土　炭化物粒子多
　　焼土粒子少　明灰色粘土ブロック
5　灰褐色土　炭化物粒子少　粘性強

貯蔵穴

6　暗灰褐色土　炭化物粒子多
　　明灰色粘土ブロック
7　暗灰褐色土　炭化物粒子少
　　焼土粒子少　明灰色粘土粒子多
8　灰褐色土　灰色粘土多
　　炭化物粒子微量　粘性強

炉

a　暗赤褐色土　焼土粒子多
　　炭化物粒子　灰
　　(火床面焼土化)



第260図　**第327号住居跡・出土遺物**

第92表　**第327号住居跡出土遺物観察表**（第260図）

番号	器　種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色　調	残存率	備　　考
1	高坏	14.0	10.4	9.4	BCEGI	C	橙	85	№7　円孔3　二次的被熱による風化・調整痕不明瞭
2	器台	(7.4)	7.8	10.6	ABCEFGI	B	黄灰	65	№3・5　円孔3
3	高坏		(6.6)	(15.6)	AEG	B	黒褐	25	№2・3　円孔(4)
4	小型壺		(9.3)	3.7	ACEGI	B	橙	60	№7
5	台付甕		(5.2)	9.2	EGI	B	にぶい赤褐	10	二次的被熱・調整痕不明瞭

第325号住居跡（第258図）

O27グリッドに位置し、北西コーナー付近のみが確認されている。

平面形態は、方形である。一辺4m以上、確認面からの深さ0.11～0.20mを測る。北辺の方位は、N－72°－Wを指す。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は出土していない。

第326号住居跡（第259図）

O28・O29グリッドに位置する。南西コーナー付近のみが確認され、東半部は調査区外にある。

平面形態は、方形である。一辺3.8m以上、確認面からの深さ0.08mを測る。西辺の方位は、N－8°－Wを指す。覆土は、自然堆積である。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は出土していない。

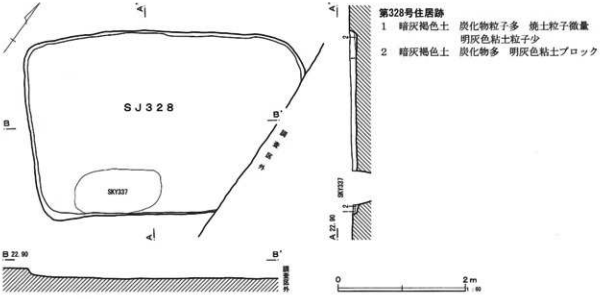
第327号住居跡（第260図）

O28・P28グリッドに位置する。確認面の高さの違いから、重複する第26号方形周溝墓よりも先行する。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。主軸長5.78m、幅4.86mを測る。主軸方位は、N－131°－Wを指す。南半部は床面がほぼ露呈した状態で確認されており、確認面からの深さ0.01～0.12mほどである。覆土は自然堆積で、南東部壁際には灰・炭化材を含む暗褐色土が堆積している。

主柱穴は、P1・P2・P3・P4の4本である。長方形に配置されている。掘形の平面規模は均一であるが、深さは南列P1・P4に対し、北列P2・P3が約2倍以上の深さをもつ。

炉は、地床炉である。住居南東部に位置している。南北0.54m×東西0.62mの円形に焼土化し、火床面直上には多量の焼土粒子と炭化物・灰を含む層が堆積している。



第261図　**第328号住居跡**

壁溝は、北コーナー部を除いて全周する。幅0.12～0.22m、床面からの深さ0.01～0.06mほどである。

貯蔵穴は、東コーナーに付設されている。南北0.62m×東西0.50mの楕円形で、床面からの深さ0.34mを測る。

遺物は散漫な分布を示し、住居中央部からは木片が検出されている。図示したほかに、壺・甕類484.6g、高坏・器台類211.3gの図化できない微細な破片も出土している。

第328号住居跡（第261図）

Q28・Q29・R28・R29グリッドに位置し、東部コーナー付近は調査区外にある。

平面形態は、東西に長軸をもつ長方形である。長軸長3.98m、短軸長2.90m、確認面からの深さ0.02～0.25mを測る。長軸の方位は、N－49°－Eを指す。覆土は自然堆積で、壁際から埋没した状況が確認できる。

主柱穴・炉・壁溝・貯蔵穴等の諸施設は、検出されていない。

遺物は、壺・甕類33.1g、高坏・器台類23.4gが出土しているが、いずれも微細な破片のため図示し得ない。

報告書抄録

ふりがな	きたじまいせき
書名	北島遺跡X
副書名	熊谷スポーツ文化公園建設事業関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	V
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第302集
編著者名	山本　靖
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369-0108　埼玉県大里郡大里町船木台4丁目4番地1　　TEL 0493-39-3955
発行年月日	西暦2005(平成17)年3月10日

所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
北島遺跡 第19地点	埼玉県熊谷市 大字上川上 天神森上317 番地61他	11202	058	36° 09′ 31″	139° 24′ 39″	19990408～ 20000324 20000408～ 20001228	20,000	彩の国 くまがや ドーム 建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北島遺跡 第19地点	集落跡	古墳時代前期	住居跡　153 方形周溝墓　27 木棺墓　1 土壙　214 溝跡　91	土師器 東海系土器 北陸系土器	方形環濠に囲まれた集落跡 周溝が巡る竪穴住居跡 27基から構成される方形周溝墓群

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第302集

熊谷市

北島遺跡 X

熊谷スポーツ文化公園建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書
V
〈第１分冊〉

平成17年３月３日　印刷
平成17年３月10日　発行

発行／　埼　玉　県
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369-0108　埼玉県大里郡大里町船木台４丁目４番地１
電話　0493(39)3955
印刷／株式会社太陽美術